228
合6
94

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94
ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94

鍾奇遺筆

岩永藿齊編

天保年間畫舶より「フイヤシンド」と云ふもの一見せ
世俗是を黄水仙と呼東都山岩崎氏考有り
黄花水仙早春葉を出す葉圖狭く長しく
扁色水葱の如し四月茎上ニ三五花を開く六
瓣弁長しく尖あり色連翹及菜花の如し
甚可賞此種文化十二年「柿郎擦」の画工「翟

228-94

「靡里尼攸協」咬嚠巴より載来て蘭舘に栽ゆ
翌年皈般時市中より日々入ば役夫清藏に
託置く清藏竊に二三根を分来て植ゆ又
是を譯士某乞て植ゆ此名「夫祇凹性都」と
云予公藏の番書に此名不見蓋咬嚠巴の
名ら蘭人「列滅麗」が著せ書に云「奈而須
斯擾逆婁里攸」典羅甸「蝶皈而列」搽掃帚是ハ
水仙の黄花有て其葉芽状ハ者にして是に
三種有り其第一ハ荷蘭に「確囉哲」大黄「蝶迤

色而列」形る者にして其葉根より生し長して狹
く都て円形有る是に觸則ハ柔にして微弱
其芽状の葉よりして莖を出し春に於て其
末に於て花を開く其形大低常水仙に齊と
雖都て小形にして盡く黄色有て能香気と
發せ其根卵顆よりして白其上面黒膜と
帯第二種ハ「客列乙迷蝶帰閣」黄花水仙と名けて
此種ハ前種よりも其形盡く小形にして但花
を開く頁小き差別有第三種と「寔攸支幕

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94
ガラス使用

列喋帰里」と名く前條の二種よりも都て花形
美麗の「亜逆庅娜」花に齊しく重辨を成
せ叓有て都て此「蝶帰閭」形の者ハ湿地
形の花園に植を得る而しく盡く自ら油気
及塩気を含ミ有「若斯加夫蠡感斯」の説
に此根を食せ或ハ煑熟して以其汁を飲料
と成せ叓可得又膀胱の諸病ニ良効有
と云然れも共ハ當今能之を実識せしたるに所
謂良効を奏すると不見此植物と「喋帰里」

と名けし所以ハ其葉ガに齊きに因て名く
余せ奈んと欲れハ「怫郎察」に於てガを「喋
婦」と名く是よりして「伊斯把尼亜」人此に「喋帰
而臘斯」と名るしより起まりと也蘭人「搠て
即度」が著せ書「搠て即度」に水仙の黄色の
花有て黄金色の蕊有あり印度産の水仙
形の者ハ紅色の花有て其黄色と此紅色の
水仙形の者とハ都てガ状の葉世花ハ長き茎
薹の葉間より出せる者に濶き其葉六枚或

其餘生する事有て根ハ卵顆也此植物を産
処我邦に於てハ花園に於て見る事有り
其時節ハ四月及五月に開く養法ハ此他の
卵顆有る根の植物の如くして以可養質
切都て水仙の根ハ温暖にして能乾燥体内
を掃除するの剤に入く收縮の功驗有ゆへ
加列麗肉斯（カレイニス）説也薬用種々の瘡毒
及ひ瘡の為に此根を采りて研磨して以其
瘡上に點すへし或ハ其花を采りて油中に浸

する事一時の間大陽に向て其油を瘡毒に
擦塗へし大腹及四肢堅強する者に此
根を研磨し蜜と共に混合て以く其患
処に傳すへし

天保六年乙未晩夏
東都藤成裕七十有四題書我堂

百品考二編云注訓菴啓淑水曹清暇録長
壽花出滇甸形類水仙黄色燦爛如金惜不
甚香
黄スイセンヲ長壽花に充るハ楓箬膺曲直瀬氏
所考也可從 キズイセン 蛮名フイヤシント云天

保年中臺舶載来ル処也葉円ふして水葱
の如く高一二尺冬より生ひて春に至て花有り
水仙に似て稍小也辨蘂共に黄色にして光
有黄金の色の如く香気水仙に比ぶるに頗高
く甚香と云に合ざるに似たれ共此ハ風土
の不同故也漢土の水仙ハ香気至て高く故
に本艸に其香甚清と云花鏡にハ清香経月不散
とゝへり本邦水仙ハ香気なく長壽花と水仙に比
ハ却て香高く此乃風土の異ル也此以彼難

文政五年壬午春駱駝を蠻船より「阿蘭毘耶(アラビヤ)」
國の内「滅通加(メツカ)」出産と云牡四歳牝五歳惣高
凡六尺六寸頷より尾筒迄一丈余同鼻先
迄二尺三寸同頭の附様迄四尺腰より背
迄三尺三寸前足より肩迄五尺六寸尾の
心二尺三寸足の平七寸異形の獸にて
馬より亦大獸也然とも精温寛水声を
恐怖は日ニ行事數十里蘿蔔を食用
す一獸日ニ三五荷を食

右阿蘭人齎来東都に献上の處御差戻
しの由依て長崎ニ越年翌六年未歳春大
坂へ来は船中にて日を送秋七月上旬より
難波村の内叶橋東にて観戲とす
漢名獨峯駝と云
後年伊勢尾張にて観場し又牝尾張にて
死す牡浪花難波村ニ両三年許居たるか
是も死せりと云

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94
ガラス使用

予少年の時京地にて柿木心に吉の一字墨を以て
書たるが如きを見及たり天然の物にて態と書
たる物に非ず衆人奇とす又天保年間物産
會品物中に柿木文字を見たる物を一見せり予
未審不睹或時北静廬梅園日記を閲する
に柿木文字の一条有りて且畫せり依て左に鈔す
白石先生の記にかこみ一尺餘も有つらん木の半
よりさけし所におのづから天下の字有と人
のんせしるに是ハ柿にやといひしかば彼人

驚されいふ知のひめらん是ハ或寺なる渋柿
を切て薪にせんとて割しに此文字のあらはれ
しかバ免てまれなる物也とて薪にせず京より来
りし物也といふ柿木にかゝる事有しと古き
書共にしるし置侍ると有按るにふるき書とハ
今物語に比えの山よかはに住る僧のもとに
小法師の有るが坊の前に柿の木有りけるが坊の
前に柿の木有りけるをきりくたかんとていちのき
れをわりける中にくろみにて有りけるが

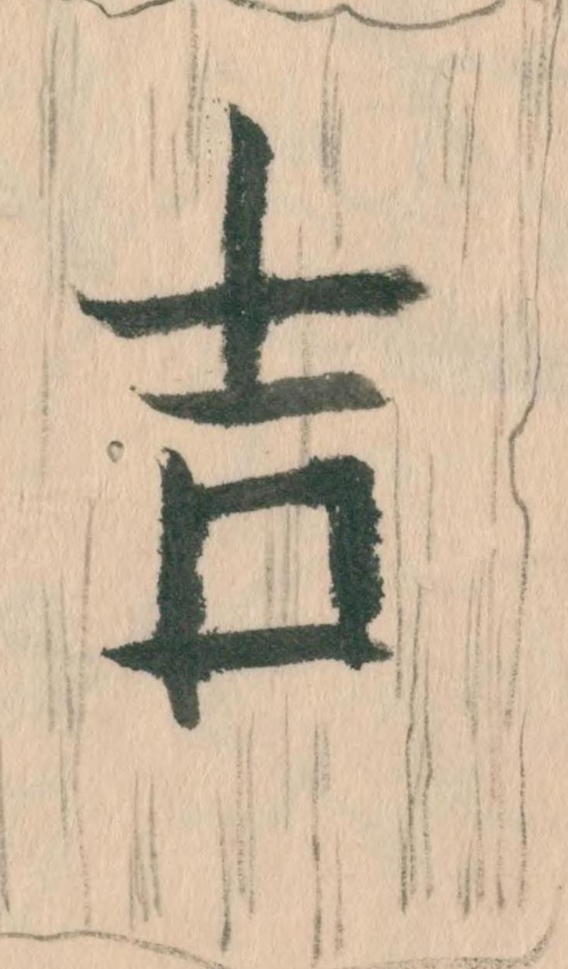
文字に似たりけるをあやしと思ひし坊主に尺
せられけれど南無阿弥陀佛と云文字にて有
けるこそしきおともいふなりけし　沙石集に
蓮養房と云山寺法師前栽に柿の木を植て
年来愛しけるが他界の後弟子の僧此木を切て
湯木にせんとてわりて見るに文字の勢二寸許にて
蓮養坊と文字有黒木の如くして木の中より
さとも同体にて有けり　谷響集に客云柿
木中有文字嘗於勧脩寺八幡神祠親見

矣或謂多是柿木也　夢渓筆談云木中有文字
多是柿木治平初杭州南新縣民家析柿木中有上
天大國四字予親見之書法類顔真卿有名臣言
行録後集に澧州進柿木成文有太平字公言今
四海騒然未見太平之象請不宜示於外公は欧陽修也 輿地碑目に
富弼とするは誤なり　弘治八閩通志拾遺に宣和五年春順昌
縣交渓廖懋以奉議大夫家居役夫解柿木為
薪木中有文曰聖元天何四字字體製端楷墨色
瑩然　春渚紀聞に晋江尤氏其鄰朱氏圃中有

有柿木高出屋上一夕雷震中裂木身亦若以濃墨書尤家二字連屬而上不知其數至於木枝細者破視亦隨枝之大小成字　許撰に柿木中間多有文　物理小識は柿木畫皮生文なと見えたるをやいはれつらん又いと近きハ友なる本間眠雲游清か鶺鴉集に文化十一年甲戌の春伊豫國大洲領宇和川村にかゝくと云処有畑中に大なる柿木有て作物の障に成れを畑主其柿木を伐く本の所を斧にて二ツに割たるに文字有太王左　月　右旁ハ不分明のよし　文字ハ濃藍色にて墨もて縁を双鈎したるが如し云々と有

又按るに柿ならぬ他の木にも書画有りし古文和蘭の書に出たり云云

長二尺九寸許ノ内ニ廿一字アラハルヽ也柿木



巾一尺三寸許

王椿

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94

ガラス使用

天明元年辛丑中秋若狭浦にて網に掛りしを油小路三条下ル伊勢屋某所持す高二尺許横幅二尺余介に非す花の如く淡紅色美也石帆に非す海松樹に魚印殻の粘着するか如し或人紫稍花と云へ共紫稍花にあらす謾に玉衣むきくと名附く愛翫せり

按に此品蒹葭雞肋帖にも出たり疑らくハ海松樹に海苔類の生せし物成るべし

風鳥 和名フウテウ 蘭名バラデスホーコル

蘭畹摘芳続篇ニ云ヒブル及ウヲイツ」ノ書ニ曰クパラデ井スホーゴル」ハ羅甸語ニテ「アヒスパラジシアカ」ト名ク羽毛華彩光耀観ルニ堪タリ世ニ甚珍重ス都児格ノ属地バラデ井ス」ヨリ産ストイフ後コレヲ審ニスルニ都児格地方ノ産物ニ非ス東方印度諸国ヨリ出スモノニシテ特ニ多馬路古諸島ヨリ産ス呼テ「ジユウアノタヒト」ト云是其方言也昔時ハ此鳥無足ノモノト思ヘリ今是ヲ明ニスルニ印度亜人其足ヲ切テ四方ニ

致スモノヲ見タルカ故ニ土人其足ヲ去リ自然ニ足ナキモノトシ其奇状ヲ人ニ教キ利ヲ射シヨヲ欲メナリ多ク龜笠ノ頂ニ逢ヒツケテ世ニ轉輸ス今此諸島番(バン)連(ツラ)ニ屬シ和蘭侫セ有ツ地トナルカ故ニ今ニ至テハ毎々其足ヲ具スルモノモ得ル也茂質梭ルニパラデイスホーコル」ハ此ニ云風鳥也風鳥ノ名何ノ書ニ出ス所乎未考索セズ恐ク、譯家等ノ命シタル者ナラン乎南懐仁坤輿外記曰孔雀(シャク)時哇(ワ)島處有鳥名曰對曰足膝下生長皮如筋纏于樹枝以立身毛色五彩

雚可愛不見其飲食唯服気而已ト説ケルモノ此風鳥ナルベシ此説其トスル所西書ノ翻譯ヲ知ルヘカラス其説曰足トスルモノ舊説ニ因循シタルナルヘシ且其曰對トナルモノ解スヘカラス對譯乎義譯ノ字乎但ニ考ヘカタシ其形状ニ因テ考フレハ極テ此物ナルヘシ今茲戊申朝貢ノ和蘭鑿斯突都兒(ストッツル)トスル人ニ鳥ノ雌雄三四翅ヲ齎シ来リ詰ノテ之ヲ観レニ其中全身黒色光彩ノモノ也ニ其雌ナリトスフ余等未タ曾テ見サル所ノ奇品也ヨシストンストル(ストン)ト云

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94

ガラス使用

人著ス所ノ禽獣譜ニ審ニス其文至テ浩繁他日之ヲ譯メ以テ其詳ヲ盡シトス今惟其約說ヲ譯メ其概畧ヲ示スト云フ花冷的印曰印度亜産ノ異鳥ノ中ニ「バラデイスホーコル」ナル者アリ「バラデイス」ハ大虚ノ夏ナリ其中ヲ飛翔スト云ヨリメ古来バラデイスホーコルトカ云フ原トヨリハ附會ノ說ナレ𪜈能之ヲ辨明スル者ナシ昔時波尔杜尾尔(ポルトガル)人「キアメ」及其近傍「ハプース」諸島並ニ新為蘭亜國ヨリ求メ来リ「バツタロテンシ」トカ云フ譯メ曰鳥ト云フヨリ然レ共又「テルナアテン」ノ地ニテ呼フ所ノ方言ニ「クコテワタ」別名ニヌトカコレアタ鳥トカ云フ也其土俗神仙ヲ称シテデワスピヌ「デワスト」カ云フヨリヌピハ鳥也此等ノ名ノ起ルハ此鳥モトヨリ足ナシトカ云フヨリ其奇ヲ称センガ為ニ命ケタルナリ今之ヲ著実シタル所ノ話說ヲ次ニ述フ昔ヨリ傳ル所ハ此鳥空中ニ飛翔メツイニ地ニ落ルモノヲ見タル人茸ヨリメ起ルト見ヘタリ然レ共「アルウ」ヨリ年々ハンタヘ齎シ来リ和蘭ノ人毎ニ之ヲ正シタルニ足ナシトカ云ヒモト意ヲ不用ノ愚人等謾リニ此名義ニ惑サテ浮說ヲナシタル也蓋昔時波尔杜尾尔人及其他

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

ノ人ニモ以前ヨリ此地ニ往来シタレ共実ニ足ナシト思ヒテ其説ヲ取用ヒタリ然レ共今此ヲ能詳ニスルニ全ク妄誕ノ説也宜ク之ヲ排斥スヘシ其惑ノ因テ来ル所ヲ考ルニモト皆距ヲ去ル者ヲ取テ来レルカ故ナリコレハ其土人常ニ其足ヲ断テ全躰ノ脩ヲ彷キ貯フレハナリ且モーレニノ人此島ヲ用テ蛸ニ注テ頂ノ飾ト大ニ用ヒ易防ケニナラヌヨウニ切リ去ルナリ且「モーレニ」ノ人世ヲ欺キ自然ニ足ナキ者トナシ多ク利ヲ得ニカ為ニスルナリ又其蛸ヲ頭上ニ戴テ軍陳ニ出テ或祭祀ノ日ハ各々頭ニ戴キテ「テスヤカリレ」ト名ク此舞踊ヲナス錦或剣ヲ手ニ持テ挑ミ合ヒ舞ヒヲトルーサ等ヲナスナリ昔ヨリ「アルー」ノ人ハ固ヨリ足アル者トスルナリ然ルヲ世ニコノ変ヲ知ラスメ其妖妄ノ説ヲ傳播シタリ窮理家ノ如キハ嘗テ之ヲ明白ニセリ已ニ「アントニウス、ピカヘト」ト云人「ペルドマゲラーニ」ノ紀行書ニ千五百二十五年ニ之ヲ明覆シメル説アリ是ヨリメ世ニ之ヲ明ニスルヿヲ得タリ其後ノ諸選述家「ゲスネリユス」「アルドロハンジユス」「アラン

シスコヘルナンデス」「エウセブ」「ニイレンベルグ」等ノ書モ
前説ヲ看破シタル明解アリ又「カロリュスクリュシウス」ナ
ル者ハ未曽テ直此鳥ヲ見ルコトナケレ𪜈已ニ千六百五
年ニ足アル者ヲ「アムステルダム」ニ質易ニ来ルモノヲ
見タル人アルヿヲ說ケル書アリ
又此鳥固ヨリ地ニ下ルヿナキモノナレハ人能ク之ヲ詳ニ
考ヘキヨウナシ即初係ニモ云ヘル如ク此物多ハ虚空
ノ中ニ在テ高木ノ上ニモ下リ止ルトヽモ至テ廿リ其
体甚軽浮ニメ其羽翮ト其尾ト甚長大ナルカ故ニ再

立テ飛ヒル𪜈能ワサル也若風動メ後ヨリ吹ニクル、
ヿアレハ毎ニ地下ニ落ルヿアリ如此ノヿアル時ニ之ヲ生ケ
捕リニセント欲スルニ其養ヒ方及食餌ニナス者ヲ辨
セズ又至テ人ニ馴レス撃猛ナル性ニテ動モスレハ人咬
ツクヿ也之カ為ニ容易ニ近ルヿ能ハス故ニ上人初ヨ
リメ之ヲ打殺スヿヲ百年以前ハ之ヲ地ニテ剝ス
ル所ノヿデリニアイタリアー」トヽ小冊ニ昔時「バビユア」ニテ其
生ケル者ヲアヒヲキタル者ヲ見タリト說ケリ甚不審ノ
ヿ也如何トナレハ其土人スラ生ナカラ畜フヿナラヌトヽヘリ

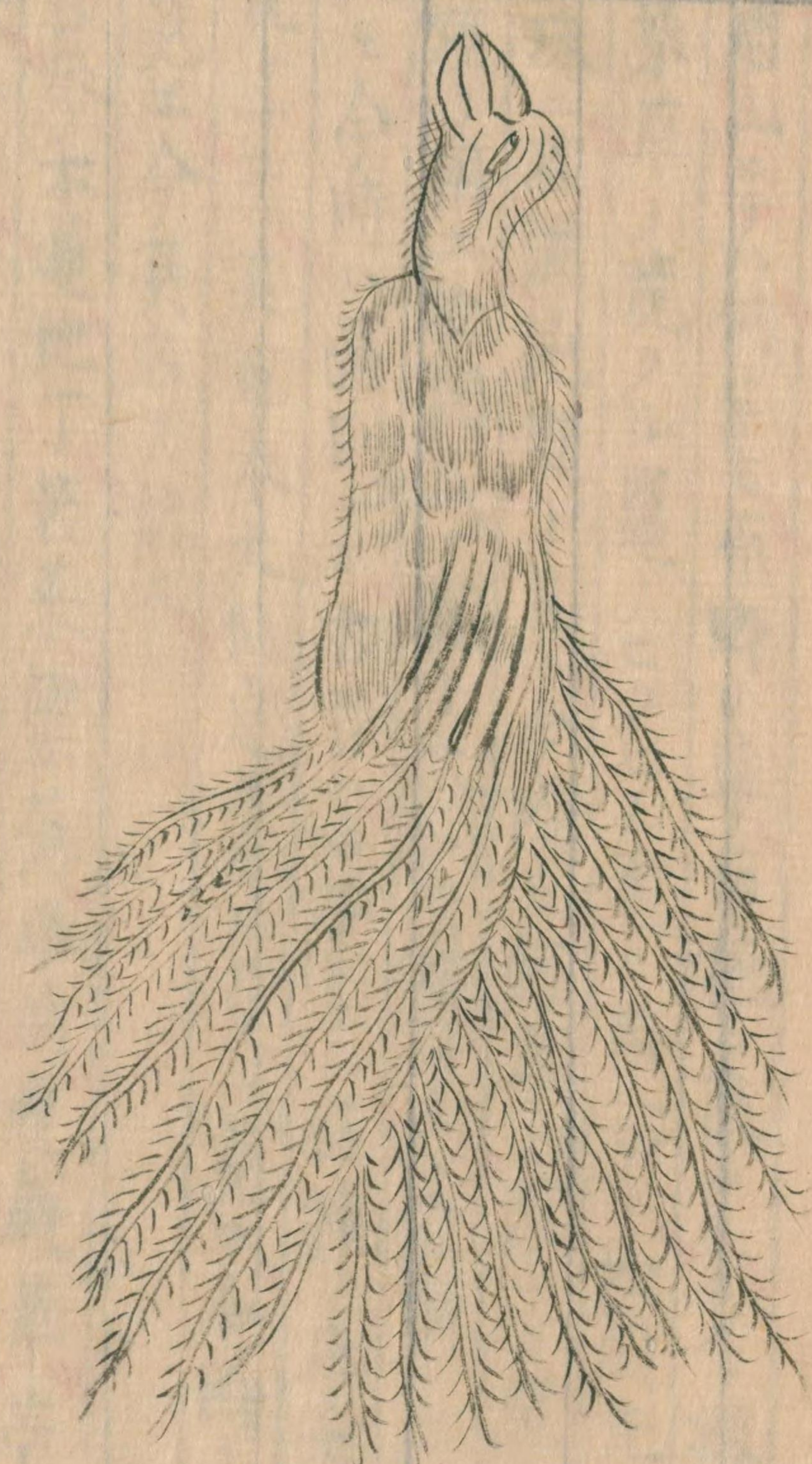
国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

況シヤ「ジユア」ニテ畜フ丁ハ決メナラス筈ナリ

此物東方諸國ニ産スル者今テ六種トナス皆称スル
ニ「バラデ井スホーコル」ノ名ヲ以テス然レモ又別ニ其形
色地産ニ因テ其名ヲ別ツ我輩之ヲ七種王鳥ノ
施ニ属ス此物其六種ノ品類各其名ヲ異ニス一曰
「コロラトアルウェセパラデ井スホーコル」二曰「ケレイチバラ
ウセパラデ井スホーゴル」三曰「ゴロラテスワルテバラデ井
スホヲゴル」四曰「ケレイチスワルテホーゴル」五曰「ウイツテ
パラデイスホーゴル」六曰「ランベケデスワルト」其一「ゴロラ

ーアルウェセバラデイスホヲゴル」躰ノ長サ二尺四五寸許
幅一手横往ホトアリ是ハ其頭躰ニ比スレハ長フメ直ナリ嘴長ク且剛
計ル所也其色青白全軀恰モ羽箭ノ如シ其嘴ノミ色彩ヲ
異ニメ頭頂ヨリ項ニ至ルマテ柑子色ナリ眼ハ甚細小ニメ
黒シ頸ハ深緑ニメ恰モ「スラクト」緑色玉石ノ名ノ如シ其毛柔ニ
シテ天鵞絨ノ如ク且甚透明ナリ胸ハ黒ク赤天鵞絨
及細羽毛ノ如シ翼ノ大サ其鳥ノ躰ニ称フ色茶褐色
ニメ強キカサキリ羽アル鳩ニ似タリ下躰ハ甚タ長ノ直ナ

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用



ル羽毛アリ浅赭色ト黄色ト交リ其両側ハ薄キ細毛ト蹠トニ細條ヲ生ルヿ駝鳥ノ翼ノ如シ其羽ヲ開扉スレハ自ラ圓クナリテ扇ヲ開キタルカ如シ脊上尾骶ノ所ヨリ黒ク〆至テ強キ二ツノ絲ノ如者ヲ生ス其尾ヨリモ甚長シ其状絲ノ如クナレ圧稍末ニ至テサラ〳〵シテ細毛アリ其ノ死シタル鳥ニテハ至テ剛ク〆橈ムヘカラス其生鳥ノ如キハ如何ナルカ未タコレヲ詳ニシカタシ且其用ヲ為ス所以ホ辨ジガタシ

安蒲兒止私巴亞列之書ニ所載ノ無對鳥ノ圖

浪華 岩薗齋輯記

百草霜

百草霜唐山ニテハ何ニテモ原野ノ草百種ニ限ラス多ク採テ黒焼トス農家草ヲ焼タル竈ノヒタヒノ墨ヲ用ヘシト松岡先生ノ説也赤水玄珠ニ名混泥散ト見エ今時モ何草ト限ラズ黒焼ヲ用ユ松岡氏ノ説ト大同小異アリ又霜ト灰トノ別アル事モ今時ハ一通別ナシ古昔ハ日本ニテハ百種ノ草木ヲ採リテ黒焼トナスニ其草木大低定リタル方ト見エ今時ノ人更ニ不知ト見エ今其名ヲ記ス

忍冬 苦参 木通 地丁 若菜 繁縷 薄荷 車前連銭草 苧草 青蒿 藜 淡竹葉 苦竹 枸杞 ウツキ 夾門冬 庭艸川芎 馬鞭ヒヨ 烏上戸 鏡草 絡石木槿シノ子 篇竹 風藤木氏 燈心苔

防已紫野干牟藍紅ナモミ帰荻蛇苺燈臺牛ノ額牛膝甚息大
麥鴉麥石ミ川茅常春犬尾瞿麥百合合歡橘鼠麹常
山曼殊沙花茵蔯各大十藥白楊木香藥師草虎杖麻皂
莢地膚鼓子苗菖小蘗秦椒ヘクソ葛小豆一八馬藺萱州
梅駒繋草菊大黄露草芍牡丹狗脊酸漿馬芹各中
蛭莚土革薺牟蹄蛇林艾柳黍豌豆小麥ハハツキ款冬續
斷楸茜莧菝葜覆盆牽牛金義草漆葉楫キミゲ三
禮スミレ各小木賊クサキ石榴以上三味餘以上二百十有四種ナリ
其中同物アリ且紫金義草何物ナル事未詳古代ハ字ノ心得
如此品物ニ定リ有ル事今時ニ異ナリ

○磨石

磨石ハ越砥ナリ磨刀用ル処七アリ
一番ヲアラ砥ト云二番キツサキ刃ノナミヲ直シ高早ヲ平ラカニ
スルヲ天草砥ト云淡赤色ナリ三番御巫濱砥ト云色青シ刃
ヲ付ル砥ナリ四番ヲ上溪寺ト云天草砥ト色同シ五番ヲ名倉
砥ト云フ東國ヨリ出内黧色外皮赤シ六番ヲ白砥一名浅黄砥
ト云丹波ト水尾トノ間ニ出七番ヲ黄砥一名内曇ト云鳴瀧ヨリ出
而仕立上ケヲスル砥ヲ千砥ト云フ剃髪砥ノ如クニメ能片解ス此
砥ヲ上溪寺砥ニテ薄クヘラシ指ノハラニ付テ磨クト云ヘリ。
安政戊午五月平安讀書室物産會鮮次スル所ノ砥ノ品名ヲ附識ス
大津山青砥丹波神嵜村灘ケ谷青砥料亭ニテ庖丁ヲラトクニ用白馬砥又ヌトキト云剣刀ヲ仕上ケ始ニ用又砲刃ヲ磨ニ用此ニテ仕ケ又金地金ヲ手入ハ合ハスト云
名倉砥三河アノアケトキニ用マクリ砥礪石五島本山砥鳴瀧村カミソリトアワセト云越砥中山ヨトヨモノ最上ナリ
佐伯砥丹波猪倉中トキニ用ユ新大村砥缶点ノモノトショウブ砥江州栗太郡曲村石山砥江州志賀郡石山西ケ嶺
ツミニ砥對州羊肝石一種山ツミニトモ云漆工用ユ土佐砥針工之ヲ用佐土引物ヲラトクニ用伊豫同伊関イシ勢州礪石新大村砥湯浅礪石
大村砥肥前奈神子砥肥前礪石砥粉石山城梶村赤モ白善明寺山ヨリ出天草砥肥石礪石
松嶌砥又新谷礪石青松砥紀州礪石キツモリ丹波原村又上引上品越砥名倉砥ニテ仕上ヨ此石ヘキ解テヘリナラデギニスルト云
扇谷砥丹波宮川玄緒青砥中ニテ多行銚子砥下総礪石佐賀砥紀州大日目砥丹波猪倉玄緒
立井砥山城廣沢池向山越砥ナリ天州砥下品硯ニ作モノ口入砥丹波目荒砥
宮谷青砥丹波世山村玄緒粗着戸澤砥常州越砥キレ刃砥山城月輪田尻石勢州田尻

大野村砥 丹波　檜山砥 丹波　本大村砥 肥前　月輪砥 月輪 越砥
一本山青砥 丹波佐伯 玄緒　青砥 丹波宮川 玄緒　水山砥 但馬　山國砥 丹波
常慶寺砥 越前越砥ノ一種針工伊豫砥ト共上此三件上石ノヨコヲ用ロ白ク別及ビ之用　赤木ミ砥 伊豫ノ名木ミヨリモヒス礪石ノ内ナリ黒ホミ山葉ナリ故ニミヒテホヒトミテウル
伊豫砥 針又印刀ホリキテ磨ク　神子ヶ濱砥 四国　越畑村砥 丹波　氷丁砥 丹波
青松砥 紀州　上野砥　石ヤ砥 肥前礪石 礪面砥ヲ之ニ用　アラセ砥 丹波桜村 越砥アラセト
大内砥 丹波大内村 越砥カミソリト　對馬砥 羊肝石ウミツミ 漆ニ用　本代日 長州礪石　杢山水口砥 鳴滝
湯舟砥 宇治田原 玄緒　佐伯砥 丹波奥条村 中磨ノ上品　青砥 丹波下ッカミ谷 玄緒　高沢砥 上野 越砥 天保年中ヨリ出
三田砥 攝及三田 一名有馬砥　本青ヤ砥 紀州 礪石ノ發着　肋川青砥 水戸 玄緒ノ一種　ウツアル砥 丹波ヒ只村
笠置砥 南山城　本山青砥 丹波芦野山村最上 菊川長布白同　水山砥 礪石但馬ヤシウミラ カミソリトシヒト云
本草啓蒙 越砥 和名カミソリド アハセド 一名磨石 砺 同上
釈名 磨刀石 羊肝石 礪石 細ナル者ハ越砥 粗ナル者ハ礪石セ
越砥 城州鳴滝ヨリ出者ヲ上品トス 上州砥ハ戸沢砥ト云 亦上品ナリ 丹後
大内江州ヨリ出者ハ其次ナリ 刃劔ヲ磨ニ用ル砥ハ春日砥最上品是
白砥ナリ 和州春日山ノ奥ニ古ヘ掘タル迹アリ 今ハ出サス 今参州名
倉砥ヲ上品トシ 城州鳴瀧内曇トス 砥ヲ次トス 淡縹色ニメ

浅褐色ノ筋アリ 越前ノ常慶寺砥ハ赤是ニ次 又スリ砥 上引砥ア
リ 共ニ鳴瀧ヨリ出 又漆ノ類ヲ磨砥ハ對州ノ虫食砥ヲ用ユ 對馬砥
共云 漢名 雑肝石 輟耕録 一名 措光石 月 即釈名ノ羊肝石ナリ 又城及嵯
峨臨川寺ノ辺河原ニ産ル 灰色ニテ微黄ヲ帯ル砥ヲモ用ユ 此ヲ臨川寺
砥ト云 又アヲハト 八名 庖丁砥 漢名 玄礪 山海経 城州木屋川砥 清閑
寺砥アリ 丹州芦ノ野山 防州岩国 紀州 神子ヶ濱ヨリモ出 又アヲトハ
漢名 礪石 肥前島原 天草ヨリ出ルヲ天草砥ト云 上品ナリ 又呼子
砥 唐津砥アリ 伊豫砥 土佐砥アリ 紀州ニハ石アヤ砥 青アヤ砥
茶神子砥 青神子砥アリ 丹州ニ佐伯砥 神嵜砥アリ 城州ニハ 杣田
砥 羽塚砥アリ　主治 磨刀垽 トキミツイトロ
磨石下滓 千金方トキミルノカタキモノ 即砥ノ粉ナリ 同条ニ越前ヨリ 萱中砥 出ス 山城多
賀ノ村ヨリモ砥ヲ出スト有 千金藥註

○萬病回春藥名

金鎖匙 山豈根 石枣 山茱萸 海石 浮石 鼺鼠 未詳
立人 鼻下人中 葱菅 葱蘆 本艸之敍名黒色曰黎其芦有黒皮裹
榮花樹皮 合歡 鬼白 白ノ誤 越鞠 卮子一名越桃川芎一名越鞠
塩泥 塩ヲ合タル土 大團魚 スッポン 土糖裘 蟾蜍ノ又 馬蛇児 ヤモリ
糞礦 溺白垽附方曰老糞缸白垢 紙筋塩泥 ヤミスサ塩土 麻稭圍 オカラノフゴ
小黄米 明流焼酒 モチアハノセウチウ 麪麥薬 コクスリ 百花芷 ハチミツ
龍虎水 龍水男尿虎水ハ女尿 猏猪 ヲブタ 三水 一本作二水即龍虎水
渾龍虎石 赤水玄珠石作水龍虎二水攪轉渾化故曰渾龍虎水
虚無秋石 不経人造自然秋石 紅撥水 梅撥水煎水経水相交攪澄
己汞 未詳一本作汞赤水玄珠本草原始並作汞 梅水 烏梅煎水
黄牙珠 人造呂詳玄 竹鏟 竹ノオコシヘラ 嬌乳 金乳粉 飛仙池 名ヤキミソ
龍虎石 龍虎水也 二水 龍虎之二水 三腥 未詳 枊桂 リヲデ桂枝
花酒 青梅酒與 両頭尖 烏喙 綿複 トヂフ 九節狐狸 詳泉州府志
茶姜汁 未詳 符水 カジキトウノ水 滄塩 滄州塩 沙漠 小便面上浮皮
蒲羅 ガマノフゴ 糞彈 彈丸大糞 黄石 大黄滑石 猪鬣 ブタノエリモ

熟白水 サユ 螺蜃面 タニシノフタ 浮子酒 モロミサケ 血鼈 虫病ノ虫
薄苛葉 ウスキハスノハ 甘州大 未詳 金毛獅子倒上樹 金毛ーー言其鬚鬢舞美倒ーー言其燃鬚髪之法
潮脳 樟脳 山茵陳 カハラヨモキ 無灰洛呈紙 ツチケナキ御用紙
白翠 セトモノコ 人退 スケカミ 夕兇日草 炙甘艸誤 不見烟的狗皮 フスヘヌ犬皮
五去風 五倍子 護膝 蔵膝類 ウチキ 糖毬 山査 繰絲湯 カヒコノニユノ繭汁
童羅 二重フルイ 紅穀小黄米 モチアハ 符薬 マチナイトクスリトノニツ 鍋粑 コゲ
火柴頭 モヘクイ 團参 朝鮮人参ノ 土硝 青脊者ーー 薄荷黄 未詳
艾挺 艾ノミク 青龍背 ナヘフタノアカ 黄花苗 地丁蒲公 鍋牌 ナヘフタ
龍芽艸 ミツミツラ 千頭子 地膚子 掃箒子 同上 煎水 サユ
麥斗 ムキノカハ 覓湯 スルユ 衣沫 小便ノアハ 馬前子 マチン
臭虫 アフラ虫ノ雅 飯粿 ニギリメシ 矮荷 未詳 空窗玄 天竺黄
青皮葱 ヤクラネギ 油姜 生姜清油煎 錫粳米 ウルコメノアメニ品ナリ
此餘許多有ヘシ予大略ヲ記ス委キハ寛政戊午坂萬病回
春薬名考ニ出蘭山先生門人堅田𦂶造著也

○胎石

株葉使記云相州三浦ノ庄ニハラミ石村ト云処アリ其村ノ中ニ一石アリ年毎ニ一ツ宛丸キ石ヲ産ス其色黒ク甚堅シ里人呼テ是ヲ胎石トス光生云ハラミ石國々ニマヽコレアリ殊ニ奥州銀山ノ隣郷ニ中島村ト云処ニハ土人文禄年中紀州熊野ニテ拾ヒ懐ニ入テ下向セシニ百年ヲ経テ大サ一拱半ニ及ブ子石孫石數々産シテ今ハ二千餘アリト云

○黙壇花

蒹燭談云款冬ハフキノヿ也古来山吹ト訓スルハ誤ナリ或云山フキ水フキト云テフキニ二種アリ款冬ハ山フキナリ山吹花トコトナリトコノ説モ不堪今ノ山吹ノ花ハ棣棠花ナリ唐詩画譜遵生八牋花鏡等ノ書ニ詳ナリ先人嘗有詩云間来披百花圖讀源氏成書未免差形状芳時運相合款冬知是棣棠花又地棠花トモ云早弁ヲ金梡喜水ト云詳ナヿハ稲若水ノ本艸附翼ニ見エタリ

又朝鮮ノ李奎報集ニ黙壇花ト云昔シ某朝花壇ヲ黙ケラルヽニヨリテ名ツクト云ヘリ

藿按ルニ黙壇花何ナルヿヲ不知今引処ノ書朝鮮人ノ集ト有朝鮮ノ名ナルカ又金梡喜水モコノ氏ハ四字ニテスミノルト見エ近来金梡ノ二字ナル支又群芳譜見ヘタリ前書ニモ抜記セシト覚ス

○海石榴

又云ツハキト訓スルハ本ヨリ誤リ荘子大椿ノヿ有レ共後世ノ花ヲ称スルヿヲ不聞近年平井徳建氏ナト本草ヲ撿メ山茶花ト云モノ即日本ノツハキナリト其後物産ノ説詳ニメ山茶花タルヿ愈明ナリ又日本ニテ云サヽン花ハ唐ニテハ茶梅ト云海紅トモ云唐ノ時分ニハツハキヲ海石榴ト云皮日休ナト詩アリ天武帝ノ十三年ニ吉野人宇閇直弓ト云人白海石榴ヲ貢スト云ヿ日本紀ニアルヽヒリシロツハキト黙アリ又古海石榴市ト云所アリツハキ市ト訓スシカレハ日本ニテ古ハ唐ノ時ノ名ヲ受テツハキヲ海石榴トイヘルニヤ宋已来ノ書並ニ當代ノ人ハ曽テコノ沙汰ナシ

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

○墨君

葛原詩話竹ヲ此君ト云ヨリ墨竹ヲ黒君ト云東坡黒君ノ記アリ
陸游カ成都行ニ墨君秀潤瘦不枯風枝雨葉筆々殊又呉
鎮カ詩長憶前朝李薊邱墨君天下擅風流ツノ外題跋
中ニ往々見ユ

○松喰蟲

寛永年中武及川越の邊の松に虫附て葉を食ひ木を枯しけれ
ばたちまち領分の百姓これを訴ふ古伊豆守殿は智深く名誉の将なれ
ばこれを占落ひたる虫を悉く捕て壺に入置し一壺の價
何程と云員数を定め百姓に傳せらるゝされば是を捕ふむねほとあく
元住くてんくり甚数百の壺を土中に埋させ三年を經て壺
を掘て是を見れは壺中皆松脂と成りてありて是を蔵せしとぞ

○放生蟲

京師方言ナリ人ヲ螫ス小毛虫ナリ五六月古家ノ天上又軒屋根ウ
ラニ生ル虫ナリ形毛虫ニ似テ灰色黒斑アリ此虫化シテ蝶ノ如クニナ
ル俗ニ蝶ノヲハト云雌ハ六七分雄ハ三四分許アリ此蝶卵ヲ生シ
翌年又此虫ヘニナルヨシ大坂ニテハジガウ虫ト呼ブ京地ニテ沢山ニ生
ル年ハ此虫ノ形チヲ大ニ作リテ鐘大鼓ヲ叩キ數百人虫ヲ送ル
ト云是ヲ放生虫送リト云カクスル時ハ虫絶ルト云此虫漢
名尾蝗ト云由百品考ニ見ヘタリ可考

○ヘクロテンシヤウ

肥後國ニ竹林枝間ニ着ク虫ノ巣アリ其色深紅ナリト方言
ヘクロテンシヤウト云蟷螂ノ巣ナルア色ノ紅色蟷螂ノ巣哉
ナリ方言ヘクロテンシヤウ未詳猶可尋

○チンチンカツラ

備中松山方言ナリ春末ニ芽ヲ出シ冬ニ至テ枯ナル多クハ

蕨ノ中ナトニアリ長キモノハ六七尺モアリ大サハ筆管ヨリハ
細シ葉ハ蕗ノ葉ノ如ク花ハ八月比ニ花咲ク花ノ形
南天ノ花ノ如シテ小シク細シ青白花ナリ茎ノ分ヨウモ南
天ニ似テ漸一寸許モアリ花蕨多クシテ着ナリ実ノ大サ着ヨ
ウハ南天ノ如クシテ九月比熟ス色ハ藍色ニシテ艶アリ
霍拂ルニ作及ミテチンチコカツラト呼モノハ馬鬼鈴ナリトス
松山ノチンチンカツラハ何ナリヤ本防已ノ類カ可尋又備後ノ
福山ニテチンチコ多トミ麦アリ上品一種ノ多ナリチンチコトミハ
細実ナルコトヲ云ヘ未詳尚可尋

○苔品

怡顔齋苔譜著述アリテ上木ナラサリシカ苔品更ニ不一見蒐
葭藏書中ニ苔品アリ写本一ト冊今テ一見セシマヽ略ス
昆布　紐布　溪菜　相楽布　巌菜　松藻　巌　蝦蛎
沖津ノリ　ヒバノリ　妹脊ノリ　川岸藻　ハバノリ　ツヽ藻　ノロノリ
カタノリ　ツノマタ　白藻　加田メ　石ノモ夜　葵苔菜　サウレキ藻
鼠藻　マタベイモガラモ　越王餘箕　袋ノリ　黒モ　メミン　雪ノリ
松葉ノリ　神石ノリ　鐵ノリ　馬瀬ノリ　鵜鳩菜　十六島　経ノヒモノリ
鹿角菜　髪須ノリ　盤ノス　虎栖菜　羊栖菜　昆布ノリ　海藻
紅葉ノリ　瀬戸ノリ　線菜　漏苔　紫菜　品川ノリ　索菜　繒菜
海苔　海羅　石花菜　海髪　水松　平戸ノリ　玉ノリ　コカチノリ　宮崎ノリ
和歌ノリ　藤戸ノリ　雪ノリ　松原ノリ　仁保ノリ　楊梅ノリ　本河ノリ
水前寺ノリ　編笠ノリ　三穂ノリ　篠ノリ　沼津ノリ　キンス　日光ノリ
相生ノリ　釜屋ノリ　富士雪　布引ノリ　松嶋ノリ　津軽ノリ　松前ノリ
五島ノリ　目ノリ　津ノリ　ツルノリ　敢馬ノリ

○有名未識類

白花菜　苔垢菜　藍菜　鶯膓菜

○水苔類

陵鞋　水苔　牛尾蘊　富士川ノリ　芝川ノリ

○石苔類

豆コケ

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

○樹苔類

白蘚　白翁鬚

○地苔類

瑞珞コケ　仰天皮　ヒロトゴケ　土馬騣　地暎蚣

右品類集記シ形状ヲ記セリ古説故今時ト異ナル和名ヲ記セリ

穩当ナラサルニ覚ヘ木孔恭増補ノ心ニヤ苔類ノ名ヲ書記セリ

今略シテ不抜

○薑石

薑石和名セウカイシ一名刑部河原イシ讃岐一名誕生石星上山牛イシ

相模又ホトケイシ能登

［一名］生姜石古文銭附方

越後高田讃岐刑部河原ニ生ス越後高田ノ者ハ黄白色又黒色

ノモノ乾姜イシト云相模海辺ノモノツクチ牛ノ如シ土人山ノ牛石ト呼ノ

般薛ナニモ姜石ノ名アリ同名異物

○蟲語

デノ虫九及四國即蝸牛　マイマイ　周防

デンボウラク相模マイマイツブリ江戸　山タシ角田川辺　カサハチマイマイ沼津

ヲボロ下野　ヘビノ枕仙臺　マイボロ常陸

文七ヰ蝸牛々庭のそこ法師ノ其角

寂蓮寺牛の子ふゑふ女ろ庭のそ法師乃角ありとても身をはゑまし

蛞蝓ナメクジリナメクジ　マメクシ　ハタセ　イボロ常陸　山ナマコ越後

蛇タルラ虫薩女詞　家クチナハ星上ニ生モノ近江ニテ黒マワリ　播磨ニテ

ヨナバブツ津国ニテ　オナビツ又巣トリ　筑紫ニテヤジラミ

一種山カヽチ東国　島ヘビ近江

武者物語山中ニ入テ細道ヲ伝ヒ行ニ足下より山かゝしと云蛇出たれ

八太詰ニ云ミヤコナタ黒キ星有リ大ハ三四尺ニ及ヒ至テ子バリ強シ

川ナダ長ニ三尺ヨリ八九尺ニ及ヒ堤又ハ池ニ住テ大雨ノ後川ニ流

出島人捕食フ油多ク美ナリト云

嶋人不食

ナタ大ナルハ六七尺ニ及トラフノ如モノ有リテ歯細ナリ勢ヒ猛

磯ニテ釣ル大ナルハ水ヲ放レテ人ニ向フ是ヲ食フニ味アリ
シテ小骨多シ
一種巨蛇ヲヘビ青ダイシャウ東国
一種カラスヘビ スクロヘビ安房 ウレタチハ筑前
蝮蛇 ヒラクチ西国 ハミ土佐 又クツバミ タチハミ房州
一種ヒバカリ 日ミス土佐
蝮蛇 ウハバミシヤバミ雲又ヲカバミ北国
文政十年亥八月稲及赤川村田畝金中ニテ一小蛇ヲ捕ヘト
テ持来ル双頭長一尺許即枳首蛇也後陰乾ス
蜥蜴 カナヘヒ東国 又カニギッテウ カニキリ相模トカキリ西国
トカケ江戸
蜂 スカリ仙台
馬蜂 ヲニバチ アンドン越前
蠭蜾 コニボソ美内 土スカリ仙台 カソリ常陸 チスガリ信及
ジガバチ東武

蜚蠊 ヲコ東国 ウスバ越右 ホコ同長岡 ボウ信濃トウコ津軽
キンコ小者名トンコ出羽 ヒメコ房及
カヒコノ蝶 ヒルロウ西国 ヒル信濃 ヒイロ伊勢
蝶 テウ、相模下野 カベ津軽 テコナ秋田 ヘラコ越後 ヒラ信
濃 テウ、ヘツトウ越後
鳳蝶 アケハノテウ チゴクテウ 上総 チコクテウ 近江
山テウ 薩摩
和名蝶 カワヒラコ也 羽列ニテヘラコ野及
蜻蛉 トンボ ヤンマ大坂 アケツ仙台
エンバ西国
紺撰名 アヲトンボ江戸 カウヤヒジリ肥前
赤卒 セウレウエンバ西国 イナケンザ 上野 コシャウトンボ越右
スチゴトンボ ナシバアケス 臭列 クカミトンボ 會津
一種ミホトンボ シモカラアケツ 臭列 シホカラエンバ 肥前
大者ヲヤンマトミオンシヤウ上総 山トンボ越後 鬼ヤンマ 江戸 生ヤンマ 土佐

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

昭曉 ツクヽホウシ ホツテウ 上野 ツクシヨヒシ 近江 クヽツホウシ
茅蜩 ヒクラシ クツハセシ 上総 カナヽ 日
コウロキ キリヽス 南部 コロヽヽシ 江戸 キリユ 美作
白石公羽ニ 古コヲロキトミシ 今テミイトヾ也 古イヌツキコヽロ 今テミイヒ也
古イナコマロトミシ 今テミキリヽス 也
イトバ 名ヽ 京 カミヨ 伊勢四國 カミキリス 尾張 カンナゴ 遠江
クロツヾ 西国 又イビコ クロ 近江
ハタヲリ 山キス 伊勢 ウリス 近江 キリヽス 東武
キツチヨ 円
ハタヽヽ ガチヤ 江戸 又バツタ又シヨウレウバツタ バタ 上野
ホツタ 信州 カタキ 阪河子ギトノ 伊勢 ハツタキ 仙臺 虎ホウ津軽
ホトケノ馬 雲又タナハタ 長崎
クダミキ 一名糸クリ 馬オイ 江戸 スイトヽ 近江 クタムシ 土在
蟷螂 イホムシリ カミキツテウ 江戸 ハイトリ虫 江戸川ニソ 信久
イボシリ 相模 又イボクヒ イボ 奥列カミ切テウヒ 肥前イホカ津軽

カワツ カヘル ヒツキ 仙臺 ビキ 西国 タンナン 唐津 シヤクノ名ウ 土在
山蛤 アマカヘル ホトケビキ 九州 アミヒキ 日 青ヒキ 唐津
蟾蜍 フガヘル 美内 ヒキヨ 伊勢 カワクヽウ
又ワクヒキ 又クツワヒキ 又鬼ワクトウ 又牛ワクトウ 又ビツキ 又ダンテンバイトヽ
クツヒキ 疱瘡 又ヤトモリ ヒキタ 奥列 又ビツキ 又ダンテンバイトヽ
モツケ 赤苗 アニヨウ 房総 又ヲカマガヘル 又アクアンゴウ 山アニヨウ 武蔵
オヽヒキ 上野 又小者ヲヘツトウトヽ 日
蜈蚣 ハカチ 上総 日本紀出
ヲサムシ ヤスダ 関東 クイロウ 肥前
蜚蠊 マイヽ虫 水スヽシ 江戸 サオムシ 伊勢
カイモチカキ 大坂 ミイヽ 奈良近江 ヲヽ
イタムシ コキマワシ 上野 スヽ 信州
水車 上総 ミコノマヒ 美作 コキ洗ムシ 肥前 サツヽ
水黽 テコヽ 水スヽシ 美内 又カツホムシ 又アメノカ 西国 テンホ
ウリ又アダヽカ 又アメノカタ 又シヨウセンカヨウ シオシヽ 木近江

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

アメカス遠江ニシオノミ　越后アレクカ　信及ミホクキ　佐カムコ三上総
アメンドウ薩ニハアハクモ　武州
コカチムシ　フドウ筑紫　カチフウく肥后
カフトムシ　ヤトヲカ伊勢　ツノ虫大和　此虫皂莢樹住虫ナリ
油ムシ　コキクラヒ伊勢　アミメ薩ニハゴキーカブロウ肥后
イモムシ一名カワムシ　ホウシヤウムシ京
黄色ノモノ出雲ニテハケムシ黒ヲトゲムシ　カイタカ津軽
シコウホウ堺京ニテ云ホウシヤウ虫也　武及ニテ信ノ太郎ト云名多シ
螻蛄ケラ　シウライムシ京　荀子ニ螻蛄ノ五技ヲ註セリ
馬尾蜂元文中濃州岐阜洪水ノ後多化生スト云話ヲ聞ク
山カヽチハ背灰黒腹ニ赤点アリ
ヤフカヽチハ山カヽチニ似テ腹地ムクリノ如石メヽミノ斑アリ
ヒバカリ　大毒蛇ナリ状小色緋ノ如腹黄白ナリ
青ダイシヤウ背淡青ニシテ腹白ク粉红蛇腹文アリ老テ
蚺蛇トナル年ヲ歴レハ色褐黒ニ変ズ

水蠶吾郷山蚕蝕食椒椿槲柘諸木葉而成繭各従其名
故相国益都沚亭孫公鋋作山蠶説曲盡物性文多不録
唐小説載元和八年大軫國貢神錦衾水蠶絲所成云
其国以五色石甃池塘採大柘葉飼蠶於池中始生若
蚊睫游泳其間及長可五六寸池中有挺荷蠶经十五日
即跳入荷中成繭自然五色亦謂霊泉絲山蚕水蠶
皆物産之異　池北偶談
壁蝨三歩許ノ者多シ赤色アリ白色アリ白斑ノモノアリ皆
脊中女シ凹ナリ伊勢ヨリ来リシハ灰白ナリ左右足ア
リカツクスヿ亀ノ如シ大サノ長一寸幅八歩許至テ大ナリ
鳳子大蝴蝶名曰鳳子又名鳳車一名鬼車　阜長蘆林
イモリ　袖中抄云蝎云法華玄賛云守宮以血塗女人
臂必有私情洗之不落可以守宮云云
蝶　テコナヒ奥州方言　トニフリ蜻蛉同方言　ニ川随筆
井アカミサン　蠐螬ナリ根及方言

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94
ガラス使用

ヘツトウ 蝶ナリ越後方言 サカヘツトウ 同汲川辺方言
カワヒラコ 蝶 新撰字鏡
野槌蛇 大者径五寸長三尺許ニして頭と尾と均し
尾不尖槌ノ柄なき者ニ似たり大和国吉野郡の
山中菜摘川清明の瀧の辺ニて是を見たる其口
大ニして人の脚を噛む坂より下ル事走ル事甚早く
坂を登る事甚遅し 齊諧俗談
オツメ虫 丹波方言 田中ニ多シト 五色文アル小虫也
コトムシ 泉州方言 蒼蝿云 蠐螬ノ一種 形大ニシテ長三寸許 遍ニシテ
地虫トモ云 後羽化蟬トナル
枇杷虫 天牛ノ一種 薩州方言 角ニ褐ト黒トノ斑アリ
鬼ムシ 仙臺方言 独角仙ノ事ナリ 此類甚多シ
弁慶ムシ 独角仙ノ一種ナリ
鬼コオロキ 至テ大ナリ 秋野辺綿畑ニ白昼ニ鳴ク 抑揚ア
リテ鳴声ノ聞ヘキナリ

ヨトフ虫 春ノ中比ヨリ秋マテ居ル 惣シテ作モノニツキ 多クハ
夜中ニ出テ苗ヲ切ルナリ 昼ハ土中ニ居ルナリ 大者二寸許リ
寒中モ土中ニ居ル事アリ 備中松山方言
アマゴ 春ヨリ秋ノ末マテ居ルナリ 諸木并作物ニツク 其
形些細ニシテ見分カタシ 惣テ物ノ葉ウラニツクナリ 其
色白ク或赤ク又ハ名レ 羽アルモアリ 羽ノ色白シ 同上
マイマイ虫 鼓豆 築紫方言 カイモチカキ 江東ノ人コミト
イリノ 關東ニテ 水スマシ 又サウトメ
實盛虫 蝗ニ似テ小ナリ 青色 兜ヲ着タル形ノ如シ
稲ツキ虫 ハタオリノ一種
イホムシリ 螳螂ナリ 時珍云 疣ヲ病者捕ヘテ食セシム
楠ムシ 天牛ノ一種ナリ
サルムシ 姫路方言 即チウリン 京ニテハテウリンシ
夕負マグラノ 伊勢久居ニテドルト呼フ
弾正ノモチツキ 加賀ニテ呼 又次郎坂ノモチツキ 又太郎殿モチツキ

何虫ナリヤ未詳
アリマキ躶虫ニテ巴ト生シ外ヨリ移ルニ非ス東都ニテアブ
ラ蟲ト呼ス
水ニ腐スル甲虫ニテハコウロ　コガ子　飛コガ子　ゴジウノ
右ノ四品大根ニツク甲虫ナリ
虞ハ祢新志物觚ノ部ニ背翅蝴蝶ノ名見ユ
没子ブト閩小記　守瓜ウリ虫爾雅注蠸一名守瓜食瓜葉者也
蚄ミノ虫　僞門之親諸叔有蚄云々
叮　相蔵志蜂叮虫ニ螫ヒルナリ
自照　王符潜夫論。蓬中拾自照謂螢火也
小窓別記云蠅虎蠅虎也一名繩虎一名繩豹　崔豹古今注
ヒワ虫ハヘヒリ虫ノ一名ナリ
螢火伊賀名張藏六ノ産ノ者ハ寸ニ及ノ近江勢田伊
賀名張黒田ノ田螺後皆化ノ螢トナルト云ニ実ナリヤ
千金方巻廿五十八云九虫ハ

一曰伏虫ニ曰蛔虫三曰白虫四曰肉虫五曰肺虫六曰胃
虫七曰弱虫八曰赤虫九曰蟯虫
三蟲　長虫赤虫蟯虫
牛蜱虫ハ千金　牛ニツクダニ　刺虫ハケムシ明年螺ニ化スト有
汝蠶ハ即石蠶和名ゲナス又大黒ムシ諸国方言多シ一種
熊野海濱石上ニ貼ノ居ル鱗甲層々タル者皆是ナリト
灌掛ルニ熊野ノ海濱石上ニ産スルイワクヒ虫ト云アリト桃
洞遺筆ニ畾ヲ出セリ恐クハ是呂九カ可尋
福州府志汝蚕似土筝長此ノ汝蠶トハ別ナルベシ
鯢魚ハ和名山椒ウオ山椒ノ気アリ椒樹ニ登リ皮ヲ採食ス
此モノ畜ヒオケバ夜啼小児ノ声ノ如シ性至テ強キ物ニテ小
池ニ畜ヒ置用ユベキ時其ハ半身ヲ截チ断リ其半ヲ又小
池ヘ放チ置ケバ自ラ肉ヲ生シ全身トナル故ニ依テ方言
ハンサキト云又一種箱根ヨリ出スハ越後ニテセンジノハンウヲト
云形蜥蜴ニ似テ腹モ赤シ故ニアカハラトモ云乾物トナシ小

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

児ノ疳ヲ治ス物理小識ニ画高ノ源ニ黒魚アリト云是ナリ
エヒツルノ虫山城鷲ケ峯ニ出ル上品トス蘡薁又ノフトフ
ト呼フ蔓ニ往々盈タル所有リテ真菰ノ根ニ似タリ其中
ニ白キ蟲アリ小児ノ疳ヲ治ス医書ニ不見此葉ノ背ニ
毛アリ乾シテヨリ揉メハ艾ノ如シ是ニテ灸ヲ治ス故ニイ
ボオトシノ名アリ
柳蠹ハノジ 左傳ニノンジト訓セシハムシト云事ナリ
独脚蜂 鎌倉ニ有リト云人ヲ螫ス片足短シト云
石蚕 俗ニセイト云 此虫魚ヲ釣ル餌トス蝶ニ化スト云
砂挼子 シシシヨレ 醍醐方言此一種ニミコシ虫ト云有似テ角色也
古昔我邦虫ヲ夜火ニテ捕ルヿノ虫ヲフヘイト云ヿアリ又ミ
ト云ニ耀ノ字ヲ用ベシ蟬ノ下ニ出
蚶八螢 印幡沼ニ云 螢火ニ非後条ニ記ス
紅梅虫 至テ細小虫色赤シ西ノ宮辺又児玉ニアリト云

○堅魚

山海名産図会ニ堅魚ハ土佐阿波紀州伊豫駿河伊豆
相模安房上総薩奥薩摩此外諸州ニ出就中土佐薩
摩上品トス魚品ハスチ鰹ヨコハ鰹餅鰹宇津和鰹ヒラ
鰹等ナリスシ鰹真物トシ横輪次トス此二品乾魚ニ製ス
カツヲノ名古シ萬葉集長歌水の江の浦島の子ゟ堅魚
つり鯛つりほこりて下略 萬葉ハ聖武の御宇の歌集也
又延喜式民部寮ニ堅魚煎汁を貢する事見へて イカリは
今ニトリと云物成べし 尚主計寮ニも志磨相模安房
紀伊土佐日向駿河豊後より貢献の事も見へたり
又兼好徒然草ニ鎌倉の海ニかつをと云魚ハ彼さかひ
にはさうなき物にてこの比もてなすものなり それも鎌倉の
年寄の申侍しハ此魚をのれら若かりし世まてははかはかしく
貴人のおまへ出ること侍らさりき頭ハ下部も食はす切て

て捨侍りし物也とやしきかやうの物も世の末になれハ上さま
までも入たつわさにこそ侍れと云云 兼好の時代にハ貴人なと
の生まて喰ひし事をいやしきことゝなりと見えたり
鰹魚のタヽキと云物有り即醢也勢及紀及遠江の物を上
品として相及小田原是に次く又奥及鎌倉の物ハ色白
くして味他に越れり

○河鹿

諸國にかしかと云ものゝ品類不定或ハ魚或ハ蛙也共云て
人の口にハ唱ふと雖徒にかしかと云名を古哥又古き物語
等に見えず唯連歌の季寄温故日録に杜
父魚カジカとしてかんの子細も不見八月の部に出せるか
を見るのミ也其余俳諧の季寄等に近来注釈を加え
し物を出せし古書物語等を引用るに不及又貝原氏
大和本草の杜父魚の条にも河鹿とし古歌にもよミ

里といふハ全く筆の誤なるべし按るにかしかの名目ハ是俳
諧師なとの口ずさミにいひそめて既に恐らくハ寛永前
後の流行なるを西行のうたなどいふを作り出して人
に信ぜさせしにも有べき既に俗傳に西行更級に住々
ときに候ひしとぞ

山川に汐のさしひるを志らすなり秋風さむく河鹿なくなり

是何の書に出せる歌ともしらされど或人に就きて此うたの
意を尋ねれハかしかハ汐の満ぬる時ハ川上に向ひて軌く
とあるき汐のひくときハ川下に向ひてころくと鳴くとハ名
へき解くまゝハゴリギハなと云魚をさすにや似ていよく昔
の證據にハ河鹿ハ水中に声ある物ハ蛙水鳥の類なり
で古より吟賞の例を不聞されバ西行ハうたを随意に
作り収たる人なれハものにあたらぬ物をよミ出たる
何かうちに論ずるに及ばねど若くハ偽作成べし又万
葉集の歌なりとて一説に落合の説とよミて（蛙原と云所なり）大原建礼門院の

山川は小石流るゝ所なくと河の底なくあらん谷の落合
是又萬葉集に有事取し其余他書に載多かなときこえ
へり又夫木集廿四雜六岡本天皇御製にて
あふみぢの床の山なるいさや川このころ〳〵に恋つゝやあらん
けのころ〳〵とハ心にはきてかゝる比喩によせし也なといひも
てはゝへたり是又謬の甚しき也是ハ萬葉第四に
あふみぢの床の山なるいさや川けのころ〳〵ハ恋ゝつゝも有
こゝに引て代匠記の注はけとは水気にて川霧也ころ〳〵
とハ唯比也私にこころくとよめるも右の例の如くと見へて必
うしろの歌にハ河ふさ廣し難ハかゝることどもそかゝるさ
ごろ勝らぬとハ今さしてそれと定むべきかしこの説
も取られハ今ハ奥にも河れむしきもあれぞく流りに従
ひて秋の水中に傷くものを汀の底にさらへて丸かし
ろといきんには強く妨も有まずき事取のふさも何しと
物によりて詠み取とせんこそいと口おしかゝる先さうらハ

物さしく古を求めんとするならば長明無名抄にいへる井堤
の蛙こそいかめかしく一の證ならにはよく當せり
其文に曰
井堤の蛙ハ外に侍らぬなり此井堤の川にのミ侍るなり
色くろきやうにていと大きにもあらず世の常のやうにあは
らさまにおどりありくこともなく常ハ水にのミすミて
夜ふけるほどにこれが鳴たるはいみじく心すミて物哀なる
なる声にて侍ると云ゝ
是今洛にハ八瀬にことと見浪花の人ハ有馬鼓ヶ瀧の邊
に捕る物即井堤の蛙に同物にして今のかじかなる事
疑ふべからず去れハ和歌にはかはづとよみてかじ
かといふはまさる也かじかの名ハ俳諧に云り従ふべし
昔井堤のかはづをこそ殊に愛せしとハ書にも見へたり
今八瀬有馬井堤に取はじめ悉く其声の有るにも
何くにかかはづハ閑情に鳴く物ハ又其さまにも異なる処

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

有り是蝦蟇の一種類にして蒼黒色也向ふの足にみつゝ
きなく指先皆丸く清水にすみてなく声夜はこまやかなる
似てころ〳〵と云が如く六七月の間夜一時に一度鳴なり昼に
もなきて鴫の声の如し尤足早くして捕ふにやすからず
川は夏の土用の水底に有る時をのミ窺ひて捕まふる今
奥をもて其物に混せしはかのかしらの俳言より加茂川
の昔をしのばれえより長明の程よりは遊びの変世に
下りも来て近来かしらの名のミ聞きて覚へしの川原谷川
に出てこそきかの声を耳得て鳴く処も同じければ是
そかしら賑しく思ひ定めしより乱りも事のもとの起ち
なるこそ失なはれぬるやらん。

再考 加茂真淵古今集聴云かも川は萬葉にも
祝詞にも一名谷潜とて山河に住みて音のいとおもしろき
き物也今も夏より秋かけて鳴故に萬葉には秋の題
に出せり今の田野陂沢にすみてうるさかしましき物也

なれより後世はあらぬ物をのミよめるはいましへの事を知らざる
也萬葉に「おもほえぬ見ませし君と佐保川の蛙
きかせてかへしぬるかもと詠めれて音のおもしろきも知
らる今の俗にかしらと云物もいましへのかはづなるべし
扨夫は春には未なき出ずして夏のなかばより秋をか
ねて鳴けり云云

愚案ずるに谷ぐゝの夏さして蛙ありと云引証を得されば姑
く一説と成へし山河にすみて音おもしろきと見えていへるは
いふさ萬葉の趣には見へぬれ共一編中必秋なりとも定
めかたし是古質の常にして種類の物をはなりちす
る川と聯く混して同名に詠まて其例あまた見られ
共古六 おもほえずきて夜せる君を佐保川のかはづきかせ
てかへしぬるかも 又蛙によせる恋の歌に 朝霞鹿火屋
が下に鳴く蛙声だに聞かば我恋ひめやもと云るなとは秋
ならぬ物なりとて尤題も秋也 又後撰集雑四かも川

さきつてとの端書して 我宿にあひ中よりしてかくらはつ
ようにおんだやもののはかなしき 是も秋の物とこそかゆ
も又萬葉 佐保川の清き川原に啼く千鳥かもつと
ふるかはよそれにに佐を 形とこなこゑをよんでしとハ
歌へるなるか いかなる川なく吉の川 蛙なく六田の淀
かなる川なく神なび川 いかなるなく清川原なとあそこ
く山河の清流にのこ詠合せく田野の物をよみた
るまじき萬葉一偏に有るなし それより井堤を詠ハ古
今集に見へく六帖にも載しかせるく かしくハ蛙にて
名ハ俳言なる事を知るべし

諸国に河鹿と云魚

越後国のその頭大く黒斑有り腹白し小ハ三寸大ハ五六寸
声有り蚯蚓に似てさへあり夜鳴く但し諸国山川にも多
し四国にて山とんこと云大坂にていえんなかせと云
伊豫大洲にハ破鮪に似て少し大也声ハ茶碗の底を
あるが如く形をも尚さえて夜鳴也鳴時両頬動く大和本艸
に杜父魚と又本草杜父魚の声をのせ尽

加賀の国のごりハ頭大にして尾に股有り脊黒く腹白
し其声鼡に似て夜鳴く小形ハ一寸許大形ハ二尺
許但し小ハ声なし

石伏二種有り海河共に有り其の物ハ腹の下にいほ有りて
て石につく杜父魚に似て小也声有りて夜鳴くひれに刺
有り海ハやちらこう也河ハかじかとし

鰍ハ山城嵯峨にてミこ魚といひ播州にてミこ女郎といふ
魚是に似て色赤し咽の下に針有りさハいひれに刺有り
大に人の手をさし 漢名黄顙魚ミコ魚ハ鮨絲魚海河
共に有り小三寸許大四五寸腮の下にひれ有色黄茶黒斑
文有り

越前霰魚此国の外所しらそれ杜父魚に充るハ誤也とし
霰の降る時腹をうへにして流れと云一名カクブツ声有り

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

杜父の種類也
石ふぐひトングロびルヲ刺殺し漢名未詳
杜父魚イシモチナ川オコゼ伏見クチナハトニコ伊豫マル嶋戯
ゴリゴリノ古名源氏ニテ石ブシ
後陽成院ノ御抄ニ[illegible]コチニ似て黒
[illegible]海名産図絵ニ筆記せり海魚考より説可也
魚の画を出せり皇和魚譜日東魚譜魚品と校合
歩びて

○[illegible]り子
八章魚の子をヘリコト呼有り岩ニ附く子也糸をちの如き物
を子等の如く連ね是を塩辛として海藤花と
呼

○亜墨利加産蜜漬柿
文久二年秋アメリカ産蜜漬柿ト呼崎陽ヨリ恵マル追々大坂
エモ冬ニ至リ来着大抵ハ全形ノモノ稀也大サ一寸余紫黒
色長サ三寸先年舶来ノ大棗ニ似テ肉多ク味モ柿ニ似タレ
圧核ノ形チ柿ニハ非ルカト覚長サ一寸又七八歩許白茶
色ニテ 如此キ合セタル如シ至テ堅シ棗ナラント思ス
山本榕室君ヨリ来翰ニ本草綱目無漏子ナラント釈名
集解皆主治此柿ニ似タリ蘇鉄ニ古来充ルハ非也植物
学ニ大棗ト画図有海国図志棗椰ト有ソイマン蘭
書本草ニ右ノ図彩色ノ画有ハルマタクチリベラ羅甸タイデ
ルホーム独乙毛棕櫚ニ似テ毛ナク蘇鉄ノ如ク葉甲アリ枝ナシ
喬木椰樹ノ如シ葉扶榔樹桃ノ葉立ニテ至テ長シ数十瓣
房ニナリテ実ヲチックク葡萄ノ如ク褐色皮付生ノ胡桃ノ如形
ニシテ長ク円シ核茶色舶来ノ核ト同様ナリ図ヲ載ス
的當也梅ルニ波斯棗ノ名本名トシテ和名ハルミヤナツメ
ノ訓ヲ命シ蘭名ダーテルホームト付テ可ナラン功能本州

国立国会図書館 タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94 ガラス使用

杜父の種類也
石くぶひトングロひルヲ刺殺し漢名未詳
杜父魚イシモチ川オコゼ伏見クチチハトニコ伊豫マル嵯峨
ムコ近江水底ヲ居て石ヲ附て石伏ヲ似たりコチヲ似て黒
斑加茂川ヲ多し頭トヒレヲ刺有りて歩行ごとし
以上山海名産圖繪ヲ筆記せり海魥考より説可也
魚の圖を出せり皇和魚譜日東魚譜魚圖と校合
歩行く

○海り子
八章魚の子をヘリコト呼有り岩ヲ附る子也糸すぢの如きわ
まる等の物を連ぬる凡是を塩辛として海藤花と
呼

○亜墨利加産蜜漬柿
文久二年秋アメリカ産蜜漬柿ト呼崎陽ヨリ恵マル追々大坂
エモ冬ニ至リ来着大低ハ全形ノモノ稀也大サ一寸余紫黒
色長チニテ先年舶来ノ大棗ニ似テ肉多ク味モ柿ニ似タレ
圧核ノ形チ柿ニハ非ルカト覚長サ一寸又七八歩許白茶
色ニテ()如此チ合セタル如シ至テ堅シ棗ナラント思ス
山本榕室君ヨリ来翰ニ本草綱目無漏子ナラント釈名
集解皆主治此柿ニ似タリノ蘇鉄ニ古来充ルハ非也植物
学ニ大棗ト画圖有海国圖志棗椰ト有ヨイマン蘭
書本草ニ右ノ圖彩色ノ画有ハルマタクナリベラ羅甸タイーデ
ルホーム紅毛棕櫚ニ似テ毛ナク蘇鉄ノ如鱗甲アリ枝ナシ
喬木椰樹ノ如シ葉梹榔樹ノ葉ニ立ニテ至テ長シ数十顆
房ニナリテ実チツク葡萄ノ如ク褐色皮付生ノ胡桃ノ如形
ニシテ長ク円シ核茶色舶来ノ核ト同様ナリ圖ヲ載ス
的當也按ルニ波斯棗ノ名本名トシテ和名ハルミヤナツメ
ノ訓ヲ命シ蘭名ダーテルホームト付テ可ナラン功能本草

ノ主治大良劑補藥龍眼ヨリ優ル功能ナリヤ明者ノ說ヲ待ツ

○蟹ノ子

近来泉州ヨリ春三月比出ス甚稀ナリ色山吹色ニシテ美也塩辛トシテ未ダ半時許塩ヲ出シ吸物トナス歯ヘアリテ酒客珍重ス春ノ比故塩辛トナサンレバ早ク損ス缶塩ノモノ味可ナリ方言未聞只蟹ノ子ト呼ス

○蹈鳥シラズ

文政ノ末比ヨリ京地加茂川筋ノ細小魚ヲ捕ヌリ醤油ニ煮テ遠キニ寄ス元来美濃ニ此製有リ夫ニ習ヒテ製セシモノナリ人能知ル所ノモノ文久三年亥ノ歳大坂ニテモ亦此製ヲ賤シラズノ名一興名ナリ

○錦葉集草名

草木錦葉集前後七冊草木斑葉ノ品ノミヲ集ム一見ノ便不聞名ノ類ヲ抜記ス東都ノ人著花ヲ多沈香木榕樹也　大鳥トラズ伏牛花ノ変

絡石ノ一種初雪カツラ　又一種千子カヅラ

又一種チリメンカツラ　又一種細葉チリメンカツラ

又一種六月ヤツラ一名ハスカツラ又一種ステゴカヅラ　水鼎カツラハ五味子ノ一種ナンデヤモンデヤ山桂一種常産神崎明神ノ神木ナリ葉ヤフノ肉桂ノ如小葉外ハ肉桂ノ如ク芽出シ黄色ナリサシ木ニテツクトス　蘭香木　杜荃山ノ変也

雀ラレ一名万年サウ又根ナレ千両ノ細葉ノ如シ

○ヲヘケチリ

東暇東夜話ニヲヘケチリノ方言江南通志山翠ト云

日光方言ミヤマスヽ声ハ鶸ヲフルカ如シ又コマ鳥ニ似タリ嘴太クシテ赤ク蕃椒ニ似タリ故ニ名トウカラシコマトモヒトヤシクルモノハ尾ノ上ト背ノ下トニ一道ノ翠碧色ノモアリ雛ヨリ飼ヒテヨク馴ルトモ一種ナル者アリ懸崖ノ三尺許入ル穴ニ卵ヲ生シ雛ヲ育ストモカムイチリテヲヽユケテリト称シハ則喜佳カニ処ノ山鼠ノ一種ナラン審出タリ

○宜禁本草

雖知苦齊道三宜禁本草二巻毒禁ノ内ニ不分明名

生熟諸穀類ノ内

メクリ ヲチカラ ソバカキ 今云ソバアヒモチ ハリクヽ アサホシ ミソヽメ 六条ヨリオフ 十二ビ 水タレ 香ノモノ スクテ トリノクチ ヒタモチ

生熟諸菜類

メシヽ汁 メシヽ苔アハイ父ノ若干 カブチ イタタカウナ

ムカデイリトサカリ ツノヽタ

生熟諸果ノ内

ウスノミ イハラコキ サヽグリ

魚

ツヽクラ オモト セワタ コシキリ

ヨトロ長シクロヤ カケ井スヽキトニ スヽサイリ スヽノ生長スルモノ

元禄十三未四月 杉田良菴玄与閲板

一見ノ人ヲ負書ヨ

膏梁の食を謹み酒ハ名歳さゝれ為志るまし

○コビノ皮

往昔コビトニ皮舶来ス即麝皮也先年水戸ニ麝草蕃息スト云足袋火支羽織ナトニスルナリコビハ国ノ名ナリ和名ニハノロト呼フナリ

○入越日記

入越日記者山本渓山君北越立山所採薬之記也開巻有
図有詩可称也今一閲略ニテ立山所得ノ草木而已抄ス
鬼臼　蚤休　刺款冬　大葉花石菖　金光花
御蓼　衛須蘭土男茂須　凍款冬　金梅草
銀梅草　三葉黄連　苔桃　山峯躑躅一名思能礼
楓唐松　田内草　菊款冬　珍車ニ一名児ノ葉
御前橘　舞鶴サウ　豆ナ一名若一葉　山嶺榛
通賀松一名通賀櫻　黄花通賀松　葱管藜蘆
蒜藜芦　山名金梅　唐松草　白花地楡　白花
龍膽　鹿子草ノ一名草下毛　立山龍膽　粘魚鬚
雪笹　大雪笹　五葉苺　鬼燈灯　観音蓮
白山桔梗一名岩桔梗　覆盆子一種　白木一種
和島作在菜中有類款冬而纖小者称片葉即赤車使
者也云々下略　加州裕越神保安芸守城址有燋米石

高岡

亜麻無邉一曰吐路々状如木耳生土上味亦相似産田川
雉大口魚極賤品其鮮新者經一夕已有小虫
金鏡魚之鰤大尺餘味極佳名為志美古
同胞更有名不吐甚五郎者皆勝蔵也土人亦貴之
金沢浩食莫肉
蠲鰒為群
波地迷諸魚冒此名者不其幾十種
赤波地迷極鮮紅嫁女聚婦待此成礼
嘉永辛亥三月晦発京同八月十七日皈京　略抄

○イラキサメ

嘉永二己酉讀書室物産ニ勢州両村廣久出品ナリ并魚
ノ歯アリテ此魚ノ歯ト云モノヲ出品ナリ勢州方言ナリト
丹後方言ニ一ワニト呼フモノト云ニ同シ古来世上ニ玩フ処

天狗ノ爪トスルモノハ是奥ノ歯地中ニ埋レテ年久シクシテ石ニ化シタル者ナラムトスル

蘆掛ニ山亀ノ爪ナラムトスル說多シ此イラキサメノ說ハ一說ナリ本上ニ有ル夏アリコノサメ木ヘモノホル奥カ尚明ニ尋ヌベシ

○鶴ノ毛玉

同年武田伊助介出品ナリ写真ノ畫添フ嘉永二年於江州坂本所拾ト重サ二分長一寸五分圍三寸白色トスル猟鹿猿牛ノ毛玉ハコレ迄一見セシ事ナキ奇品ナリ

○唐種麻黄

文久三亥歳岡本庄兵衛麻黄ヲ下種ス発芽セリ其形初生故漸七八寸許木賊ニ似テ至テ細ク青色ナリ木賊ノ如ク不空虚実セリ節モ黒色ナラス白色ニ見エ奇品也是迄長崎ヨリ来ル者ハ皆木賊ノ細小ナル者也舶来麻黄有花ノモノアリシヲ混テ其子ヲ下種セシヨリ天王寺ノ方ヘ蜘蛛ノ巣ノ如モノ先ハ九ク一ヵ所ニ集リ尚追々ニ繁茂セニ夏ヲ希フ

○白昼ニ飛白糸

室暦巳未十月十四日天気快晴ニシテ無風四方霞ノ如モノ左ナガラ二月ノ比ノ気候ニ不異シ此日大坂淡橋ノ方ヨリ天王寺ノ方ヘ蜘蛛ノ巣ノ如モノ先ハ九ク一ヵ所ニ集リ下成テイクラトナク引ツキ飛行シケル落ントシテハ又上リテ飛行多シ其中ニ一ツニツ落タルヲ取テ見ルニ全ク蜘蛛ノ巣ノ如クニテ其糸余程太シ堂ヘ入レテモノハ皆消テ跡カタナシ此日午時ヨリ飛午時ニ至リテ止又何トスル夏ヲ不知殊盛ニシテハツ時比ニ至リテ止タルモノ乎

蘆掛本綱附方ニ飛絲ト出ル

○谷原イホ

利根川畾志云谷原イホ此鳥昼ハ人目ニ見ヘラス故ニ見
人稀ナリ大サ羽色鳶ニ似黄也多ク帯タリ五月ノ比
ヨリ昏夜蘆中ニテ大聲ボウイ〳〵ト鳴ク声ノ螺
ニ似タリ シギノ類ナル一種ノ者ナリ
大倉州志十七物産 蘆乾ミ 潜テ蘆ノ葦中ニ北郷謂
之蘆鵙夏秋入テ饌 畾出タリ

○ポンポン鳥

又云ポンポン鳥小鳥ニテ谷原ニ栖ム夏月昏夜ニポ
ン〳〵ト細キ声ニテ鳴ク鳩ヨリ小サシ

○焼葛

和州吉野辺ニテ食用ストテ云葛ヲ水ニテ煉リウハ水アカ
ヲ去リ裡ヨク坚ク子リテ厚サ其冝ニマアセ切リテ
火中ニ入レテ焼キ洗イニテ吸物ニ用ユ其味豆腐乾
ノ如クサ異ナル風味至テ雅味ナリ

○紺色綿

安永ノ始肥後國ニ紺色ノ綿出来タリ一年ニシテタ
ヘタリ又讃岐ニ有リト云ヘ共未見

○かしハ

行餘随筆ニ云
あふひかしは柏葉也山城國加茂の社かしはの神なり十月
志ハ白く支のなかはそよふあつまの奥山のあふかしは埋まけり人
古今集
いそのかみふるからをのゝもとかしはもとの心は忘られなくに
夫木集 青かしは
君かうへあけるきる山の青かしは葉代まれにも見えまちかひん
同 むらかしは
埋もれし遠山かけのむらかしは毎に彩る雪押ふるらん

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94

ガラス使用

同
片山のあさのたかしにさかしきすけこ梢に鳴なきし蟬の声哉
新六帖　あつからしは
身をまさり嘆くはかりの風の秋のゆふの恋しはつ
同　保留かしは
葉わけ行よとゆかのあつからしは木の八月のとを夜すからも
附識
玉かしは八雲　堀川百首
難波江の藻にうつもるゝ玉かしはあらはれてたに人をこひはや
色葉和難に云藻にうつもるゝ玉かしは石を云玉ハほめたる詞也と云
いをとうしは八雲又ほむし
景行紀曰十二年次于柏峡大野其野有石長六尺広三
尺厚一尺五寸天皇祈之曰朕得滅土蜘蛛者将蹶茲石
如柏葉而挙焉因蹶之則如柏上大虚故号其石曰
踏石
ほむしとも云る是也いわとかしは玉かしはなと石をかしはと云
此柏のかくとれのひしよう云と知へし
○カハ螢
利根川図志云俚言にカハホタルト云ものあり亡者の陰火なる
由形丸くして大さ蹴鞠の如く光りは螢火の色に似たり
夏秋の夜あかりか雨の夜ハ至て多し水上二三尺離れて
いくつも出て遊りまはる如し或ハ東り或ハ散し又ハ高く
又低くあかる時ハ矢の如し又雨の前ハ夜おく多く是
を見るべし又花徳山へ龍燈の上るも有り板陰火龍燈の
属種々の書に多見ゆれと春暉か見たるとて西遊記に
記しまる築紫のしらぬ火又越後国新屋村仮塚氏
の咄を牧之先人雪譜に出し多ゝ頸城郡糸山の龍燈
も爰に一奇説を挙く　義知壮年の比印旛沼の辺り吉
高に有りし時比ハ五月の末にしつか朋友来りて云ける様今

宵ハ空も晴れていと静也 鼠に鈎にかゝりぬへしと云ふる友等
も幸の夏と思ひ早速に仕度調へ弐人連立河岸
にいたりまうけし舟にのり江の中に至り朋友の舟と十
間許隔て棹つぎ立舟を繋きて鈎をたれて居たり
しか室早子刻思ふ頃俄に黒く墨の如く曇り朦朧として
物すさまじき程なりしか大風吹起り雨降出し激しき大風の闇と
なりて十間斗離れ居たる朋友の舟も不見なりしかハいと怖
ろしと思ふ内幽かに遠き水中より一の青火閃きて舟に上りしかハ
是なん彼老若のヤハホタルならんと舟かたにたれ居しと
方に近附来り出かく見んと思へとも風強けれハ舟も動き
必すしも不成 衣服ハ濡れて戦慄なるに必を立つめ朋友を
呼んとすれとも更に声不出 如何せんと思ふ所にヤハホタルハ
我舩の舳に乗りたり 先ハ高ましくと思へとも出るへき折なく
只眼を閉て一心に念仏唱るのみ暫して雨止ミ風も
ちと静まりぬれハおもむろに眼を開き見れハ早ヤハホタルハ

何処へか消うせぬ 空もすこし晴て朋友の舟も元の處に居たる
ゆへ此時始て声をかけ今のヤハホタルを見しやと問へハ彼も
見たれともおそろしさに物も云かたく呑やかにし人公地附て
早々家へ帰り来りぬ 翌朝漁師なる大勢居たる
まゝにて右の咄しを委く物語せしに漁師なと云るハ甚
信の事ハ度々のことなり 桑一時夜漁におゐて彼ヤハホタル
我舟に乗りたる 其時ハ大勢なれハおそろしき事も不思 舟
棹を以てカに任せ打叩しに 砕け散て舟一面に大
きなる塗附たる如く甚腥きる磨るに物なしといふ
質油の如く阿膠の如く成りしといふ 洗ひとれとも不落 皆
あり暑中なりし洗ひ落し甚と大勢物語し 又云る一
人云る四五年以前の夏事なる哉 夜投網をもちて鱸漕
に出しに彼ヤハホタル いつと無く来り舟近くよりて
と飛廻りて網とりハ剛気の男故 此時大声にて我に
さとしけれハ家をまつき形ちかくふ舟を廻てとし彼ヤハ

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94
ガラス使用

又追ぬれハ網より八網を小くなりけるまゝ舟の舳先に
突立あがりて手頃を見定めてそと網を打かられハ接に
不互ヤハホタル一ツ其手かゝせしに其付も腥きるにさへ
方脉し網の中ハ一面に青き火とあるめかくして不斎
いかなあへき様形く手にれても洗ひかれハ志ニ手ニ
三日も腥かりし故一此夜も大勢かゝれ舟を洗ひしか流八巳
なりまありて居りし友云ハ手を合さりしといへれ大に笑
ひぬ彼ヤハホタルト云物を生捕て其質をあらハさハ
ハ印播江の猟師あるべし
藿附識ス京地三条千本の辺にて文化年のころ
こくらき夜なりし光り物出るを網もて押へしに細小の
火と形りて飛ちりしか其網袖より香を焚きしことかく
百千あり何りやあつかりしり臭気ハなかりしといへり
ヤハホタルト同日の話なりし陰火の質ハ此ぞ類なるや
尚やうまほし識者を待。

○醫心方和名
醫心方一見ス總計十巻合冊写本也欽本真呉ノ医心方ナ
リヤ薬名ノ部ニ和名ヲ附ス今所ノ処ト呉ナリ依テ其
呉ナル和名ヲ抜ス尤原本誤字多シ

鹵鹹 アホシホ　藜灰 アカサ灰ヒ　狼毒 ヤマタヒ
鬼臼 マツラチ　毒公 タツノオ　蒴藋 ソクト
皂莢 カワラフジノキ　藜蘆 ヤフムクラ　藺茹 チアラヒ
貫衆 鬼ワラヒ　蕪荑 ヒトヒクラ　狼牙 コミツナキ
蔵尾 コア爪モ　女菀 エナノホ　葈耳 ナモミ
紫葳 ヲウセラ　白及 ナヽア　飛蓬 シホケ
蛇衘 ウトアノ　辛夷 ヤフアスキ　石南草 トヒラノキ
虎掌 キホノア　茅根 チノネ　麻 アモノス
羝帯 ノホリ　陵藁 アワカネ　狼跋子 フネノミ
雲實 ハアヒノケ　槐子 エ爪ノケ　地膚 ニハクサ マキクサ

青葙子ウマクヒ　析蓂子ツハヒラチリ　王不留行凡ノクヒ
牡蒙チヽノハクヒ
雄鵲ヲサヽキ　樗雞ヌテノ木ノムシ　蠮翁ヒヽリ人
亭長タカツラ虫　馬刀アキノカヒ　赭魁クロイし
女萎エミクサ一名アマニ　菊花カハラホルキ　細辛アラノネクヒ
柴胡ノセリ又ハマナ　酸棗ヒラトコトヽ又ウナナツメ　天名精ハアクヤナ
當飯山セリ又ウセツ又カハヒク　防風ハア凡ナハクヤナ　決明エヒ凡クヒ
桔梗アリノヒフキヲクトキ　藁本カヒミナヒルサラシ　麻黄カノチクサヤアケ
前胡ノタナノカリ　玄参ヲクヒ　桑根白皮クルミクケ
狗脊ヲニチラヒナチラヒ　石韋イワノカハ　白芷ヒヨモチヒロライ
白薇セミコクヒ　白蘚ヒウセクヒ　于姜クヽラ
蜀椒フヒハシカミ　亭歴ハフタカナ　大戟ハナヒトクヒ
甘遂ニヘラ一名エヒクヽ　沢漆ハヤヒトセヽ　恒山クヒキ
蜀漆ヤナウツキ　半夏ホソクミ　款冬ヤフラヽキ
牡丹コアクヽヒ　石南草トヒラノキ　地楡アヤクム

五加ムコキ　沢蘭アチクサ　黄環マチカツラ
紫参チヽノハクヒ　貫衆鬼ネラヒ　藜蘆シアケシハヘラノヒ
白蘞ヤフカム　白及カヽ人　蜚廉ソヽキ
淫羊藿ウムキ又ソリクヒ　虎掌ホホウカ　莽華ムクレンシノハナ
蓋草カイナアシノアキ　夏枯草ウルヒ　蝟皮クヒフ
桑螵蛸ヲホネカフクリ　䗪蟲ヲノムシ　蠐螬凡クヒムシ
海蛤ウムキノカヒ　蜣螂コロハシ　馬刀マテノカヒ
虵蛻ハアノモヌケ
緑青安乎仁　雲丹岐良　石鍾乳伊之乃知
石硫黄由乃阿和　雄黄岐仁　石膏之良以之
鉄精加奈久曽祢乃佐比　加代赭阿加都知　大塩之保
鉛丹父尔　彩錫已布祢　銀雷灰加知酒所乃都知
伏竜肝加末都知　赤箭乎止乎止之又加美乃也　天門冬須末呂久佐
黄精於保恵美也万恵美阿末奈　沢瀉奈末為又於毛多加　甘草阿末岐
菊花加波良於波岐　人参久太良加乃仁毛久左久末乃井　石解以波久須利

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

牛膝 以奈岐久佐
巻栢 伊和久美
細辛 美良乃祢久左 比美乃比太伊
獨活 津知久良
升麻 止利阿之久左 比利為祢久左 宇多知久左 於久久左
房葵 世末奈須比
木香 佐宇毛久
龍胆 衣也美久左
菟糸 祢奈之久左
巴戟天 世末比々良岐
白英 都久美保呂之 乃比祢
白蒿 之呂与毛岐 波良与毛岐
加
著實 女止久左
薏苡 都之多未
忍冬 須比都良
絡石 都多
防風 波末須加奈 末仁加奈 波
石龍芮 宇之乃比多比
千歳虆汁 阿末都良 止々岐
黄連 加久末久左
王不留行 須々久左 加佐久左
景天 伊波久左
天名 波末多加奈 波末布久良左
蒲黄 加末乃波奈
香蒲 女加末
決明 衣比須久左
續断 於仁乃也加良 波美久左
雲實 波末左々介
黄耆 也波良久左
徐長卿 比女加々美 加々毛
蛇牀子 波末世利
漏芦 久呂久左 阿利久左
茵根 阿加祢
飛廉 曽々岐 之保天
旋花 波也比止久左
鬼督郵 乎止乎止之 太知止之乃久奈
當皈 加波左久
秦艽 都加利久左 波加利久左
黄芩 比々良岐
勺藥 衣比須久須利
乾姜 久礼乃波之加美
藁本 加左毛知 佐波曽良久
麻黄 久礼乃波之加美 阿末奈
前胡 宇多奈
知母 也末止己呂 也末志
大青 波止久左 久加久左
玄参 於之久左
苦参 久止利久左
石竜芮 布加都美
菝葜 左留止利 宇久比須乃佐留加岐
敗醤 於保都知久女久 佐加末久左
白芷 加佐毛知 佐和宇土 佐波曽良之
杜衡 不多末加美 都不祢久左
紫菀 乃之
白鮮 比都之久左
白薇 美奈之古久左 宮 久左 阿末奈
紫参 知乃波久左
淫羊藿 世末止利久左
蠡実 加岐都波奈
疑冬 也末不岐 於保波
牡丹 世末多知波奈
防已 阿乎加都良 伊加都良
女菀 恵美乃祢
澤蘭 阿加末久左
王孫 奴波利久左 以奴波利
爵牀 乃々毛
白前 加々牟
百部 布止都良
高良姜 久礼乃波之加美 加波祢久左
薺苨 佐岐久左 美乃波
馬先蒿 波々古久左
悪實 岐多岐須 宇末布
莨菪 美久利 佐久
垣衣 之乃古久左
水萍 宇岐久左
海藻 之末毛 末岐毛
昆布 比呂女 衣比須女
蒺藜 阿乎乃利
井中苔 伊乃美止利
蔛菜 奈岐
鳧葵 阿左々
莵葵 以倍仁礼
鱧腸 宇末岐多之
蒟醤 和多比
蘿摩 加々毛
甘遂 尓波曽 尓比曽
葶藶 波末多加奈 阿之奈都奈
芫花 加尓比
沢漆 波也比止久左

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

沢漆 波也比止久佐乃女　大戟 波也比止久左　芫花 波未尓礼
旋覆花 加万都保 加末保　藜芦 也末宇波良　楮鬼 為乃止岐
烏頭 於宇　羊躑躅 以波都々之 毛知都々之　茵芋 尓都之
射干 加良須阿布岐　鳶尾 古也須久佐　半夏 保曽久美
由跋 支都波多　虎掌 於々於曽乃美　莨菪 於々美留久左
蜀漆葉 久左岐 山宇都岐　恒山 久左岐　青葙 宇末久左
牙子 宇万都奈岐　白斂 也末加々美　白芨 加々美
草蒿 於波岐　連翹 以多知波世　白頭公 奈加久左
蔄茹 祢阿左美　苦芙 加末奈　羊桃 以良々久左
羊蹄 之乃祢　鹿藿 久須加津良乃波　牛扁 多知宇知久左
陸英 曽久止久　蓋草 加岐奈　夏枯草 宇留岐
烏韮 知伊左加古計　蚤休　鼠尾草 美曽波岐
馬勃 於尓不布須恵　雞腸草 波久倍良　蛇苺草 久知奈波伊知古
苧根 乎乃根　菰根 古毛乃祢　狼跋 布知乃美
三白草 加太之呂久左　紫葛 衣比加都良乃祢　草麻子 加良加之波乃美

格注草　鳥蘞苺 比佐古都留　狼毒 也末左久
鬼臼 奴波乃美　芦根 阿之乃祢　甘蕉根 波世乎波乃祢
萹蓄 宇之久左 多知末知久左　蒲公草 布知久左　商陸 以乎須支
女青 加波祢久左　水蓼 美津多天　蔓荊実 波末波比
猪苓 加之波支　枸杞 奴美久須美　龍眼 佐加支之美
女貞 多都乃支乃美　只実 加良多知　山茱萸 以多知波之加美 加利波之加美
呉茱萸 加良波之加美　秦皮 止祢利古乃支 多牟支　檳榔 阿知末左
衛矛 加波久末都々良　秦椒 加波々之加美　紫葳 乃宇世牟加都良 世加世支
蕪夷 比支左久良 也末仁礼乃美　食茱萸 於保多良乃支　椋子木 牟久乃支
折傷木 以多比　黄環 布知加都良　石南草 止比良乃支
鼠李 須毛々乃支　挙樹皮 之良久加支　白楊 波古也支
水楊 由也奈岐　榧実 阿布加乃美　梅骨木 美世都古支
木天蓼 和多々比　賣子木 加波知左乃支
文蛤 以多也加比　蠡魚 波牟　鮧魚 阿由
鱓 宇奈岐　蝟皮 久佐不　紫貝 牟末乃久保加比

雀蘆須々美乃都保 若菜都波比良久左 蘇以加衣
江蒲草津久毛 鴨頭草津支久左 雞冠艸加良阿伊
香薷以有良々岐 馬芹宇末世利 蕺之布岐
赤檉宇呂乃岐
右大略ヲ抄ス

○柹花

夷白堂食物本艸東郡松宗谷中彙撰一帙三本ニ云柹ノ條ニ牛奶柹小而侶牛妳者至冷不可多食今人火乾者名柹花貨之罡方今世上ア、ホシナト呼モノナラン

○野馬

野翁物語云霧島山ノクルリ山ノ麓ニ池多シ大ナル八廻リ三里モ有リ數五六十モアリテ湖水ノ如シ野馬ト云モノ有リ形馬ノ如ク髮長クシテ地ヲ引毅姿ノ獸ナリ人ソ害ヲナス事ナシ

○アツホウ

後方羊蹄日誌伊勢松浦多気志楼著丁巳蝦夷紀行也云アッポウ蝦夷ノ方言也鵞鳥ノ一種ト思ハレ共大ヽ異ナリ朽木ノ穴ニ住ミ至テ柔弱ナリ毛亦至テ和ヤカナリ予石カリノ産トアリケシノ産ト二品ヲ藏ス木枝ヲ以テ一トナデシケルニ忽斃死セリト云圖有リ別記ス

○海獺 并昇天

利根川圖志云目戸ク鼻ヨリ葦鹿島迄ヲ黒ハヘ瀬ト云黒石多シ岸ヨリ四五町許離ル嶋ニ有年中此島ニ在リ此獸ノヒレヲテツピト云食用ニス株藥使記ニ見海獺本州ニ主治ヲ缺ク東医宝鑑味鹹無毒主人食魚中毒骨傷人及喉鯁不下者時珍食物本草味鹹平無毒食之消

腫及癭瘤邪気結核骨ハ焼灰服治鼓脹腫満又脂
金瘡傳ヘ良
一説海獺ノ大者蝦夷ニテトヽト云又紀州ノアシカハ海驢成ヘシト
云ヘリミチトトヽトハ同物ナリ海獺ト海鹿ト同類別物ナリ形海
獺ヨリ大ニシテ脐ハ痩セ其毛薄茶色ニシテ左右鰭ハ海
獺ヨリ短シ是ヲ以異リト云
海獺ノ大ナルヲトヽトヽト云ト雖此アシカモ天上スル物ト見ヘタリ
想山著聞奇集文略 豊後国佐伯侯藩士間某七郎左衛門ト云
砲術ニ好シ天保五甲午九月山猟セントテ一両輩ト共ニ出冬至
鉄炮携ヘ城下ヨリ一里半雲ト山ニ至リ海上低黒雲生シ烈
風海水巻上暴雨車軸流シ山海鳴動物凄シ遊士モ
側ノ堂ニ入海上ヲ眺ルニ何トカ不知海中ヨリ雲ニ移リ昇天
スル有様ニテ雲間ニ火焔ヒラメキ真ニ一文字ニコナタヘ差テ鳴
リ来ル間侍立ニ鉄炮ヲ構ヘ矢比ヲ待テ火焔ヲ目當ニ打タ
ルニ手答ヘモナケレハ打損シタル歟ト心得其内雲吹掃晴天

ト成タル故其日ハ飯宅ナシタリケル翌三日目ニ同國北浦猟
師海獣漂着ノ由代官エ訴ヘ出窺見ルニ海獺ト見ヘ
テ惣身短毛茶色背通リ黒ク濃ク腹淡茶色鰭大
惣長サ七間横巾九尺許珍敷海獺ナリ役人遂一吟
味スルニ惣身聊疵ナシ只左目ノ下穴有リ探リ見ルニ六匁
鉄丸出タリ是正敷間氏ノ打タルシト主君ノ聴ニ達間氏エ
下サレシトナリ
肉ヲ剥切ニ背肩思シヨリ細小骨無惣身肉ノミ白色
油多味鯨ヨリ美ナリ労症ノ薬ナリトテ一家中ノミナラ
ス遠方ヨリモ食シニ来レリ冑皮ハ泥障トナス十八掛ト
ナレリ海濵ニテハ魚ノ昇天スル事モ有モノナリト云

○牧岡粥占穀名
牧岡神ハ河内國河内郡ニ在リ正月十四日神供所ニ於テ
大釜を居ヘ小豆粥を焚雄竹五寸許ニ切リテ五十四本ヲ九ニ一

とし種物五十四品ニ笈毎ニ書附釜の中ニ上下ケ粥を煮て
後笈を釜中ニ入レ小豆を旧記を以て考へ豊凶を上下す
なちうる声を告ると云

御粥占の記　・聞ナレサル穀名有リ

麦の分　いくりこ　こご麦　むま麦　ゑびす麦　ゆふろ　おそ麦
早稲分　四十日　竹も餅　赤のせ　ここの稲　いしこ餅　おそ餅
美ざこん　ふた川餅
あげ田の分　簑笠餅　まくりべ　たくて餅　ゆると　ゆるこ餅
あげ中田の分　まくたる　こうり餅　ひらの稲　はのち晩　赤せんぼ
たんご　はのち餅　けおう餅　おはものちくらこ
あげ畑の分　まゝこ麦　もちきび　ちゃせ　あつき　いとそば　あつき麦
下田の分　いしぜ　いしき餅　ごまのちへ　ちくさ　もちのかね　赤せんぼ
せゝこあせ　すゝかや
下畑の分　まゝご麦　赤ご麦　ますめ　いそ　もちきび　ちくさきび
あつき　そば　きいろ　・已上五十四品

○東芳帯齒草名

東芳帯齒　江村如圭著享保丁未写本三巻也齒有其内出名
七車草　九輪草ナリ　掛鐘草　砂参也　三叉葉　葵エビサウノ
消巻未詳　志賀菊　高麗菊也　アミタ州　八重葎ニ似タリ
常盤菊　鉄早蒿　シヘタラヤウ　メタラノ木
右ノ外有フレタル品ノ齒許ナリ松岡稲先生ノ氏ナルカ今時トハ
右説故大ニ異ナリ

○オサキ

上州オサキト云獣有リ人ニ取付キ居ラレシ其家の血筋を
引キシ物ハ如何ニしても離ルゝ事なくして其家の存
異林の外の家へ入ルハ則おさき付来る也食を毎日
与ハ害ナし怠る日有ルハ何と云差別なく喰ヒし
仇を成ス江戸へ出ルハ忽おさき離るゝ附随する不
能関八州の司王子稲荷有故にしと云野翁物語

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

藿披るゝ獸の形状を不言只物に託く事を云へり
西国にて云犬神のぬきと見ゆ疑らくハ狐ゝ

○圍子石　紫石

豊前国中津に産す山を掘ばハ土まて丸くかゝめ多く有る
の大さ柑子の大の如し皆灰色也破てみれハ何んの物
紫色の土を包ミあり此一山皆け石有り同上
紫石同栗野と云ところの金山にあり鼡色にて一片くあり
まく肩平にて色け目有り又石中に木葉紋射る文有
は名有り石ハ鼡色也木葉ハ椎葉栗葉杯多て同上

○平家醋

本草上要録云松岡先生字本二巻時代書聞ゆ于之伊豫ノ國平家醋と云ハ
平家の時代醋の代用にせし木にと咸平樹形らん
下有り咸平樹何形りや可尋

○油硃

櫟齋隨居放言云見今洋船所齎貢之葉財底野迦
雜腰蘭之類貯之玻瓈壜瓶膠鉄葉罐鎖利中而
封其縁以朱色蠟様之物印番家花様文字其状考盤餘
其朱色蠟様者和蘭謂之良津加是趙雲菘詹曝雜記
雜記所謂油硃堆紙上者是也今江湖上不解油硃
為何物故聊詳焉

○子蓮

呉ハ舒鳧徐園秋花譜曰子蓮蓮子所生莖々細小如出水新
荷花一朶大於彈丸離披敷弄於不成紅蓮房芷鬚亦
僅形似如對粉䙰紅増人憐惜其種法用頭窠雛卵
三枚穴其頂毎一枚納蓮実三枚封其穴固雞羅卵中令
雞伏之雛出之日取蓮實滌淨養泥水中其得氣者
解脱実時根生寸許細藕便能作花大約九枚中唯一

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94
ガラス使用

枝一枝唯一花不能多也花之紅白各處蓮実厚薄予曽
于邊安劉中丞浅園見子蓮白花略帯青色喜任撫
邦俗謂之茶碗波須陳扶揺花鏡及物理小識亦載
之而其種法小異且無其名故録于此

○越冨山産毛莨

毛莨葉色稍紫色重弁其形状不足為奇也只怪花老而
花心又抽小茎其茎頭又放花又抽又放至于三四層奇絶
可愛　奴々揺宇須歯有与此品同
萬香花侯索其名侯以花鏡有臺閣梅之目因名之曰
臺閣毛莨　皆拠扶桑花重臺者屏翁山謂之花上花ノ一毛
莨亦可

○佛手柿

周櫟園閩小記曰閩部二十里曰齊舟坑氏衆族其間旁有
潭夾種桃花相傳唐陳處士隠地舊名道者嶺前
有柿一株根如斗結実如仏手相指屈伸層畳有長
五六寸者皮穣色味則皆柿也

○夜光木

塞北小鈔曰夜光木生絶塞山間積歳而朽月黒有
光移置殿上通体皆明白如螢火迫之可燭物金川
鎖記曰夜光木其木不易多得率在深山人跡不到處
疑數千年古木所化積雨山水暴下随流赴大江土人
撈得以献日間与尋常朽株無異夜有光瑩綠如螢
火踰月漸退惜不能耐久世俗謂之比加利炎
藿拠昔朽木渇水青色者夜光予度々見之譬ハ魚肉
塩ヲ以テ倍ニキツシト呼モノナト夜光ルモノナリ此理ト同シ木
悉ク光ルトニハ至ラサルナリ予所見一間半許杉ノ木ヰツキリ
処半分光ルヲ見及此余程大ナルモノナリ渇水ハ尤光ツヨシ
螢ノ位ナリ螢火ハ呼吸ニ依テ光ツヨキトヨハキトアリ是レハ
光リ同様ナリ燈ヲ以照シ見ルニ朽木ナリ

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94
ガラス使用

○廣東人参

東都高嶋烈祐啓筆記歐西紀行巻廿一巻云廣東人参說先哲所論不一而其說茫乎無確定矣小野蘭山翁充之三七草根程赤城以為洋参為程氏之說此本草從新所謂並然而又茂質所引諸說紛々未知孰是蓄疑久矣往年壬戌初春奉　命行歐西始抵清之香港邂逅漢人羅森北京產也曽來日本有紀行若干巻筆語之次及廣東人参頗有所得焉而猶未能無微疑於是赴薬肆得品類將以為考證之資惜哉此時無佳品遂至期揚帆解纜可謂遺憾矣後五月初旬抵英吉利龍動府一漢人唐学塤在焉学塤字伯友浙江金華府人也鄰邦情厚日夜往來于吾舘中筆語之次又及医事尭廣東参三七草等問且出余所携之廣東乾根示之而考訂審該翌日学塤亦携乾根數品示之余把之而熟視玩味乃廣東参洋参並三七草等品種之區別覺為蒼君素判然曰記之備他日之遺忘也云按皇國所稱廣東人参者形似沙参根色灰白外皮有橫紋味苦而甘此品寛延之始從唐山舶載來藥舖之謂为薬樣廣東存疑云長崎藤谷良右衛門曰即今俗ニ廣東人参ト呼者清商渡来セシ者始ハ奧ノ人参ト通称ス寛延元年初持渡同二年始テ商買ニ九菜舖廣東人参ト称ニ为薬手ト称ス引廣参品田村元雄人参譜作范補色黄黒市人唐为薬ニ似タルヲ以テ为薬手ト称ニ或ハ为薬人参ト呼ヘリ尓來世以之為廣東人参然而未実知産廣東否且先哲或以為参類或以非参類其說無一定余在香港之日以此问清人羅森彼果曰非参類蓋木類也廣東固不産参我邦産参之地滿蒙廣三旗耳更名之曰瀋東参乃三椏五葉與韓種不異此外無産参之地其他以参名者如苦参沙参皆以根形相似称之耳非三椏五葉之参也今廣東人呼為参者二品一曰西洋参一曰杜参

朴参産於美國西洋参産於法國此二物俱非参類也廣参
存疑云寛政戊午春阿蘭入貢余依例與使對話質問方法于
術諸次及某物其医列得吉曰貴邦稱廣東人参者出北亜美理
加至見古西土謂之亜美利加参我曾市易得而致之廣東從
來不知貴邦貴重此物故未曾將來也去歳偶爾將來乞許始
知貴邦稱廣東人参者即我曹所謂亜美理加参曰所其形状
及地名吉曰僕未至彼地故不得見其枝葉何似只其質其皆
係乾根至見古之地彼州大馬頭孜羅巴商舶輻輳之要鎮也
以故其近傍諸国所産皆集此地所有品類多非其土産意
者此物亦非本地産是以泛称星利加参若得其生草種子或
葉錯写真附使奉贈所知呉氏云大西洋仙郎西者亦其人得之
亜美利加以致廣東者人参並呼色年又作年又直称人参色年
作年並参之轉訛也西洋國不産人参皆依本邦及支那之諸
名以称之而廣人呼人参者亦是目見而漫呼者西人假而用之
物畢竟非其本名也幸以俟後博聞之今予此說稍有因提于此

其稱西洋参者乃一種之蕃草而亦與朴参不同蕃人呼之柒土
甫盧若其花似百合六弁向下云余叩其形状之詳從臘葉中
出之以贈余其晶今出于後根様則如人参而外皮無横紋色有
光沢其質甚堅実切之如舩來白芨而味苦寒微甘根之大者
如指小者如地黄劉氏松峯説疫云洋参形似白芨而其性頗涼
総不知其為何物云云蓋指此物其形果非三椏五葉之種容為
一吳草羅氏又曰西洋元来無人参唯有此一種靈草能治肺
病其根似人参故彼国人呼為西洋参係法國産西洋指法
国今所見示貴國名廣東参者乃我所謂朴参而又使此
西洋参不同此物為湖北所産之木形似人参蓋其始美国
人移之於本國培養蕃殖然而天度之寒温之殊土地肥
瘠之不同質味一変頗類人参即橘偸淮而北為枳之類也
殺也故我邦人呼之名朴参即原初美国産而本邦人輸乾根於
廣東者 廣東存疑云欧羅人是ヲ支那ヨリ伝ヘ申此其自然生ヲ
北亜美利加州加拿太ノ辺等ニ得茂之ヲ欧羅巴州ニ移シ今ニ在テ

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94
ガラス使用

ハ彼ノ方亦播植スト云ヽ許說ヲ得タリト此說早羅氏ノ所言ナ故ニ挙
于此我邦甚不貴重之奸商偶齎之於貴邦遂得廣東人
參之名耳也其廣東人參之称全係貴邦之名称故漢人
不知耳
程赤城曰蒙問前開二宗人參敬侍只知同種此宗廣東
人參之称以係貴地方言言在唐多不有遍至医家薬舗等
唯有西洋人參或洋參之名耳此宗原係西洋人年々帶至
廣東之地貿易分售各處是以將其先出地名或有廣
東之称亦未可知云々此說亦与羅氏之言符
今就羅氏此說考之
本邦所称廣東人參乃漢人呼為朴參者而与彼所謂西洋
人參自為別物彼西洋參者
本邦曽無舶来故人不知其品味故或者疑為西洋參不知
与彼西洋參又有別也本草從新所言西洋參苦寒微甘
味厚気薄補肺降火生津液除煩倦虚而有火者
相宜出大西洋仏蘭西形似遼東糙人參煎之不香其気甚薄
又文房肆攷云西洋參形似白泡糙參煎之不香嚼之苦多宜
於治火又洋參雖似糙參而気味不香者乃彼云所謂西洋
參而与此朴參不同也又清咸豊八年所定各國通商税
則中一巻進口薬材門云美国參每百觔六両則知現今貴
重此朴參者唯
皇國而已美国人亦不知云亨於薬舗檢朴參中得彼西洋
參而根其色黄色有光沢質甚堅実味苦寒微甘同之薬
舗比呂字手為下品云知此呂亦雖朴參中而未發世人不
知之却為下品始知先哲以廣東人參為三七根之說非而
程赤城為洋參之說似是也然尚未係美国之産与所謂
西洋參殊異也予在彼地又見三七根形圓結如烏附而
有皺條長鬚色暗黒又如烏附其品自別物一種有細長
如他黄者發与朴參固不類也是所以雖先哲巨家其
說不分明今挙写生二品出于左

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

廣東人參即朴參又云実理朴參
湖北蒼木唐學撿木類羅産地美国北部
草幹二莖一根五葉如柑深緑而細枝互生初秋開花微
黄帶紫実小如粟粒根形細血如小指外皮有横文色
浅白切之内白色潤沢味酸苦而微甘其性軽浮不実
主治去風消疾
西洋參
在仏郎西之日於博物館即西洋參之草形乃先哲所遺
腊葉相符故記以為左證
時偕問儁者有其本国人羅尼者羅尼善我日本語兼
讀漢文亦庸中佼之
番名柴寸南盡若清地名児蔵無
莖幹高一尺許左右互生血枝枝間又互生長葉三寸許闊
六七歩本末細女中央張大貝如竹葉毎葉末巻曲而莫
抽花色茶褐而莫黄寸許朶四也紫而細六出向下巻曲
狀如蕙花後結実似橙実而尖小黒色根形亦曲直不一直根形
如小指外皮色横紋色茶褐而通明有光沢如黄蠟望
内黄其儁堅実如唐芍藥味若寒微苦生根香烈云
主治開胃口進食療曾服痛痛並肺病云
産地東印度 佛即西管内馬児的尼加加爪哇是
等種皆産於油濱暖地枝葉花実俱不用但以根
輸漢土為貿易漢人以之為清肺生津之葉名品
洋人參而甚貴重富商為其獲利入手便爾故藏
貯不多云近来又彩於南実里幹具以矢野地倍養
殊盛以是作藥酒名清參甫盧若參酒為心肺痛
之奇藥又取生根細剉漬焼酒絞之飲服兼冒口進
食治諸肺症又作糖菓服之除咳嗽其効如神云

右譯西医所述之説

正月七日與羅森筆語次問廣東參洋參三品如左

高鳥烈

問

日本百年未有貴邦亦渡及名廣東人參者未詳花葉亦是三椏五葉乎

答

不知

問

然則非貴邦産欤

答

弊国産人參唯崇滿漢三旗而已謂之関東人參即三椏五葉也他未聞産人參地

問　出所捜之廣東參示之　烈

日本以此物為廣東人參如何

答　森

此物非人參也弊國人謂之朴參産於美國為木類也其根大抵一根二莖五葉如苗細枝互生亦秋同花微黄帶紫実小如栗松実国人呼之為

羅森

清參輸送貿易廣東廣東人又輸諸貴邦故或称廣東人參依然弊國不知有此名蓋貴邦亦未深那支得

問

西洋參乃此物乎

烈

答

弊國指産於法国者名西洋參為此物異

森

問

請聞其說

烈

答

西洋元来任人參唯有一種靈草能治肺病其根似人參故弊国人呼為西洋參乃産法國蕃人呼那物名柴辛甫蘆若

森

問

吳氏本草從新行謂西洋參者正為柴辛甫蘆苦欤

烈

答
然
問
通商税則云美国參與那物吳欤　烈
答
然吁為美国參者朴參也即今所見示物是也　森
問
廣東人輸日本者此物乎　烈
答
即此朴參　森
問
何不輸西洋參　烈
答
産品不多且弊國亦貴重之故不足輸他邦　森
烈

其草之狀如何
答
余未到外邦故不看生草唯有此腊葉而已先生近日當之
法国那時可要看生草
五月十三日楼唐学塤筆語之次又及藥物出行携之廣東
參示問之行說與羅說略同仍発洋參至三七根相似否學
塤翌日携乾根數品且辨焉曰人称廣東參即係洋參此
說甚是其西洋參之質堅而形直色潤而性皎有補元天不
足之功何謂此物非三七草根大凡三七之根其形細而如銅絲
赤色味甘此物異形故非也此物名朴參又曰蒼木其質軽
浮不実其味酸苦而微甘有去風消痰之力産美国即廣
東參是也因與法国參別也若論其花葉之狀草幹之形
生雖略知一二然実難以筆而詳述之望君覧此表依叢言
將可消解久疑之者是幸
右答
唐學塤

高島先生之問
列柳羅以為西洋參唐以為洋參非西洋參一似有誤蓋
祢謂則異而為朴參則同也然以廣東人參豆見為朴
參確乎底柱

番紅花
番紅花名雅穫蘭蕃名洎夫藍此物元來產荷蘭
品為藥用久矣曽睹欲詳其形狀以絶域遠境無由探之
故先哲亦無之考近日舶來有一草呼為洎夫藍草其花
似躑躅深紅花葉亦不香此物唯因其形狀相肖疑是名
耳余於印度地穫始見之其花紫六弁形如躑躅花心相
葉長寸許色紅而狀如絹絲葉頭合三又形如銀杏葉又
似雞冠花芳香在葉如麝巢似冬門冬而深青長尺許
根如韮其色深紫而形稍圓一根生四五葉每歲至盛夏
抽花則採芯陰乾齎諸邦甚夥妙治血分云乃典
本邦人所用主治不異又以之為金瘡良藥蓋亦治血分故
耳又一種有白花者出于独逸本草畫譜葉樣雖同葉花
香気差在云但余未覩白者耳
産地 皮嚕吧 深紫上品 新阿蘭陀 色濃為下品

此草距赤道以七八度之地為限故西洋人雖移植各所不生
道光紀年佛蘭西人嘗採種於皮嚕吧播養本國作巨
室窓屋以硝子板造障並備火器以寒暑針合天度
始生然花益芳香不堪藥用云由此觀之雖番人観生草
者甚希況
皇國人乎故先哲益由詳考亦宜哉

胡椒 昧辰支 酉陽雜俎 番名比南留
續漢書曰天竺國出石蜜胡椒黒鹽細目集解掩微引
酉陽雜俎云胡椒出摩伽陀國呼昧履支其苗蔓生
其葉晨開暮合時珍又云胡椒今南蛮諸国及交阯

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

鎖南海南諸地皆有之蔓生附樹葉如扁豆山菜烈拇摩
伽陀國即指今天竺錫蘭南番諸國即今葡萄牙渙南
海南皆指今呂宋暹羅並印度諸地皆暖地産也本
草所說如此而此物

本邦不産以舶来乾実培養亦莫生者蓋皆係泡製
也是以未詳其状矣余抵欧羅巴道歴印度獲親視
之故懐生実来播之家園皆萌生世之人皆萌生就中家
君同僚村上良三素志稀覯之学因世之亦萌生於之今
枝葉蔚茂生意可掬於是乎余之喜可知也昔日葡萄苜
蓿自博望侯徧滿漢土悪得此物徧滿
皇邦有裨益国用於万一乎大凡述形状如左木幹大者数
丈小者丈余形如柳枝茎極軟弱数条下垂及地葉似秦
椒而稍長大毎葉互生色淡緑而滑沢到春問嫩枝生極初
夏開小白花形如枸杞花々後結実青如山椒熟紅如南天
燭至熟紫黒初秋乾枯後為黄色採之在未熟灌湯
陰乾貯之前深山有大木圍六七尺又有一種條枝如葡萄而有
小刺人作棚架引之乃此種与本草所説雖稍似非蔓生如州
者葉又与扁豆山薬異且不最開暮合則本草二氏之説並失考
今出圖左

主治西洋所用亦与本邦漢土不異能解食毒温胃中飲癖
不可欠云

産地交趾 呂宋 印度 時珍云滇南海南皆指以上三所
新嘉波 錫蘭島 葡萄牙 摩伽陀國南蛮諸国即指以上

檀香 白檀 紫檀

本草綱目時珍云檀有黄白二種葉如槐又引大明一統志云檀香
樹葉皆似荔支引藏器蘇恭云檀似秦皮綱目所説如
之所謂秦皮木似梓而葉両對槐樹亦両對荔支似龍眼葉
如櫧而長俱不同状不知何以擬之今予所親見白檀者
質堅実而肌理如梓高数丈外皮青如梧葉如櫸而

無鋸歯楕圓寸半青黄帶赤而三葉對生有光沢至夏開花形似榛而長実如無患子其核堅実土人採以彫刻為器玩紫檀則木皮紫黒而堅重葉厚於白檀深緑帯黒亦無鋸歯大葉三寸許形圓於櫧而大葉互生至枝尖皆五葉相對葉有蜘紋無光沢至秋葉間開花如栗而短結実如栗而小去殻肴白肉味如榧実木高丈余或數丈肌理細密白檀実有樟香紫檀実無香白檀木辛温微香紫檀木苦寒微渋是的二種之別矣其所産諸州皆在焉然有香者南州暖地而已聞以南種移北地則葉細小無香南人觀之或為非檀是土地風気之所令然也諺言研檀不節得茂茎無乃此種之類歟今面其真以明與本艸所説有同異也本草所謂黄檀者余未嘗睹之也

青鸞

淮南子云飛龍生鳳凰鳳凰生鸞鳥鸞鳥生庶鳥李商隠詩云相思樹上合歡枝紫鳳青鸞並羽儀會経鸞鳥一曰雞趣其音如鈴鈴々然本草綱目鳳凰條下時珍引恭宗衡云象鳳有四赤多者鳳青多者鸞黄多者鵷紫多者鸑鷟白多者鵠鶴矣古人立其名如此而一々未區別其状焉将鳳不同歟月淮南子則似自有別予於英國難會窩圖所觀有一珍禽雞喙蛇頭雉尾鸛顙鴛鴦頤頸朱而胸青羽翼異色而有圓紋全身五彩四五尺合尾八九尺名之青鸞産天竺然未見其多青者独胸焉耳乃非也歟別披瑞應圖云雞身五彩鳥降于青州土人呼曰青鸞則形状大低與吾所見合也即青鸞之名非虚称也青州今朝鮮國也又海録碎事云軒渠國有九色鳥青口口綠頸紫翼紅膺丹足細頂碧毛細背玄尾名曰錦鳳其青多紅少謂之綉鸞将此物歟嗚呼雉鸞鳳之属莫不蒐羅而牢籠理之弊亦到于此是西狩獲麟所以見謝孔子也

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

駝鳥　附食火雞

駝鳥番名加須計留産于南方諸地唐書曰永徽中吐火羅國獻大鳥高七尺其足如駝有翅而能飛日行三百里能噉銅鉄夷俗呼為駝鳥又後魏書曰波斯国有鳥形如橐駝有羽翼飛而不能高食草与肉亦能噉火本草綱目駝鳥一名食火雞時珍引鄭曉吾學編云洪武初三佛齊国貢火雞大於雞長三四尺頸足亦似鶴鋭嘴軟紅冠毛色如青羊足二指（二指共爪三 指之誤）利爪能傷人腹致死（此四字恐誤）食火炭又引郭義恭廣志云安息國貢大雞雀身駝蹄蒼色舉頭高七八尺張翅丈餘食大麦其卵如甕其名駝鳥実皆一物也烈按同吾学編所謂二指之語則雖似駝鳥実可為食火鷄矣即後魏書所云是也駝鳥之状唐書並義恭所云為是與大同小異故謂予嘗審其状食火鶏頭有肉冠駝鳥無冠而駝之雄者二指雌者三指食火雞雌雄並三指駝則三彩火雞則五彩本草所説含糊不了恐是傳聞之説所以與吾所目撃有異也其倶産南方則雖似一物其実有不同耳

麝香

羅氏識余曰王夢政云凡麝之所産以亜西亜列為上品其産欧羅巴列者皆無香不堪薬用所以然者麝性好栢食之而生香欧羅巴列不生栢木故無香云烈按唐王維詩云藤花欲暮生猿子柏葉初齊養麝香又越辭之雜説云西北之麝並乸而食柏故其香結東南山谿有松無栢故不結香云又着確類書云毗審頭而黒麝食栢而香凡所食之気蒸性淙身莫相虞忌棣菴大淵君麐章麝考既引着確類書與羅氏之説相合矣可見雖漢土係東西栢木之有無如此况欧羅巴列之地僻于西北而無柏焉射常食草乎亜西亜亦有二種東京洋子江為最上印度次之而漢産又有上下腰早所豊皮薄肫有鱗紋色帯紫背毛淡赤茶褐者断膜近

嗅之香気甚悪遠嗅之其香反佳。即洋薬考所謂漫皮様。而茶舗呼之為腐麝香是其上者也又断臍近嗅之香甚佳而遠嗅之不香者其気為薄者然而北印度産優矣是其漢産之下者也印度所産者細毛脆短而黄褐色形徧如月餅香気佳是為其次品又一種我羅斯止白里亜着毛色微白形稍圓者此品香気甚薄。又隻出漢産之下品之下。即所謂麝香是也漢人亦以是齎諸州代真麝香蓋亦足為證矣壬戌歳所内野州於此時僅得斉人齎帯二麝品。予与撰之一則稍圓者係止白里亜所産。一則臍昂而豊若係漢産上者漫頭様也蓋漢産之佳者雖漢土亦絶乏矣以後於荷蘭國波花欲与洋医扁𢷬絶児ス医談之次遂及射香彼亦言欧羅巴雖有麝香常渇漢産而為薬用故價貴而不易獲之是以近来洋医麻斤羅夫着以琥珀油滴篏二味製一方。以代用亦功效相当云。然余未知其如何王夢故者唐国医官乃漢口人也

犀兕

犀番名理能須。爾雅曰犀似豕郭璞曰形似牛猪頭大腹卑脚有三蹄黒色三角南州異物志曰犀如象大大色黒似豪猪食草木也南越志曰高州平之県巨海有大犀其出入有光水為之開郭璞犀賛曰犀之為形兼牛豕为無不傾又本草綱目時珍云犀出西番南番滇南交州有山犀水犀兕犀三種又云山犀居山林人多得之水犀出入水中最為難得并有二角鼻角長而額角短水犀皮有珠甲而山犀無之兕即犀之牸者亦曰沙犀止有一角頂上文理細膩斑白分明不可入薬洪武初九真貢之謂之独犀角是也又引劉恂嶺表録異云犀有二角一角有額上為兕犀一在鼻上為胡帽犀又郭璞云犀有三角者蔵器曰犀無水陸二種以精粗言之通天者脳上之角綱目所載諸説有異同如此後人不知所折中矣今予就所親觀審定之山犀水犀俱有牸牸之別而為品種

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94
ガラス使用

焉水犀山犀俱牯者二角牸者一角二角者一在眉間一
在鼻上眉間者短小鼻上者長尺或二尺水犀一者其角黎
黑有光沢先鋭而後漸曲者今人謂之烏犀角即為之水
犀南越志曰巨海有大犀是也山犀者鼻角短於水犀
而細直不屈者其效尚次水犀美其状水産俱如水牛而
大二倍有肉尾亦短如水牛水犀者全身皮黒而有皺紋苗
紋形六角而尖毛有甲山犀者無甲唯有皺紋如象二
種俱有五爪金牙耳大而如馿馬其山犀之牸者唯一角而
在頂上水犀之牸者亦一角而在鼻上時珍曰犀沈犀犀独
犀者山犀之牸尓雅言兕似牛郭璞曰一角青色是也劉敏
宁謂胡帽犀者則水犀之牸也其角俱短而小深黒色
光沢為下品矣至如通天三角犀白犀則非理加宁希産
而他邦曾莫有焉乃時珍一角二角之説為是而郭璞曰三角
藏器曰在水陸俱為非也胡該云犀之七種其三在汝漠益此
之謂也汝漠乃指何非加云

嘉女理与無

余在錫蘭島之日得彼地所産之一奇虫番名嘉美理与
其合尾二尺許高脊長尾四足背有肉鬣及尾全身細
鱗尾円長如蛸腸其指五三指生而首末二指稍離對生
每指五節相握自在目大而瞼脹有皮包之両眼運動各
異右眼則上視左眼則下視忽甚色不一定平時雖深緑
而赤胸乍白乍青乍黄或淡赤或暗黒蓋横発恐懼感
觸変物而変其色好食小虫其舌円而長其端両岐善弄
千物々不能定常以尾端能纏樹枝咄嗟其肉而常尋
宁居故此物甚恐蛇其性尤順発朶其人若以指入其口不
嘗咬傷東海人如之移畜屋中周歳不喫食不死冬月蟄
地中但産于天竺印度捕此物喫古人所謂十二時虫哺蛬
等形相肖仍今録其説併以献於医痒聊備参考
耳

嶺表録異云十二時虫則蛇師蜥蜴之類也土色者身尾長尺餘脑上連背有髮鬣草樹上行極迅速亦多在人家籬落間俗云一日隨十二時變色因名之又嶺南異物志曰南方有異大如守宮足長身表肉鬣赤色其色隨十二時變名曰避役本草綱目時珍云十二時虫一名避役出容州交州諸處生人家籬落樹木間守宮之類也嚙人不可療海島逸志曰蝘蜓状似蜥蜴長五六寸身高脊膳尾長鮮細其行甚捷捷於緑葉之上則身之色青行於灰則身之色黒其身能隨地之色而變云依是觀之嘉女理乍無其土二時虫蝘蜓蜥蜴亦同類耳但時珍嚙人不可療者與嘉女理与無異焉然蛇有嚙人與不嚙則此類有一種嚙人不可療者亦未可知矣

角魚

角魚俗名一角者地理志名独角魚綱目名骨咄犀轂耕録以為大蛇角番名宇仁古不留即角魚之謂也時珍又引松漢紀聞云骨咄犀不甚大紋如象牙帯黄色作刀靶者為無價之宝則又為犀類予向在咬𠺕巴初得真物産氷洋中地理書所謂是也小口無鱗腓皮如海豚魚目小而頰白頷下有小鬐背青腹白又有小黒斑點如斑魚腹尾両岐鼻前有角円長似杖至端而稍細長大者丈餘短小者一三尺人至七八尺皆長身之大小而不同也角之質如象牙而内空如桐木外有綫紋黄白乃松漢紀聞為犀類時珍為大蛇皆失考蓋觔魚之類其為独角魚為尤當也此物雖番人蔵之者危少猛烈角鋭利喜觸舩突逐鯨鯢身如鋸齒魚故漁戸漁人不能近之有時誤以角貫巨艦底不能自抜而為人所得然大低自物折而逃去故舟子雖往往得之全角者甚稀也況全身乎

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94
ガラス使用

鋸汝奠

閩書所謂鋸汝者殷属本草綱目鮫條集解蘇頌云
長喙如鋸曰胡汝時珍云鼻前有骨如斧斤能擊物
壊舟者曰鋸鯊山堂肆考是名鰯魚即番名佐亜貝
者是也其種有五余所目擊者身無鮮色青白有銀
光背腹俱有髭鬐尾短不岐嘴邊青黒是物于南方
暖海逢鯨輙以其鋸嘴突其腹肚剖嘴折其腹中
則有毒発鯨以刺人亦為瘡不可療云余向於亜東伯洋
護二刺今献其一於医庠焉長三尺余濶三寸如鋸歯者
左右各三十八枚五種俱大抵三分其身一為鋸嘴故見
嘴之長短而可知身之大小番畫魚譜亦出此焉田中芳
男曾譯其番説亦與此相符文攀不載任昉述異記云
海魚千歳為鰯魚亦為此類也欲抑名同而異欤未可知
田中芳男伊藤圭介门人信陽産也今為開成局教諭

栗氏千虫譜

東都栗本氏著也有蟲一見ス女ニ許ヲ披ノス
八人枕 甲斐方言 蟲一ツ二ツ三ツ入蚕アリ是ヲ八人枕ト云
ゴミコウ坊大坂ニテ云ミコウ虫京地ニテ北条虫八九月ニ蝶ニ化ス
カンタリス芫青ノ一也イスハニヤ国ニ産スハイトト云義ナリ紅毛語也
葛上亭長 ハセカヽシ又サルボウト云
絡新婦 女郎クモ又ハタオリクモ 蟢子 エツサクモ甲斐ベツカコウ江戸
小喜母 尾長クモ ○八方クモ足正ク八方ヘサス
ベツカコウ 毒アリ八脚ヲ二本宛四方ヘヒロケ小児戯ニ両手ニテ眼口ヲ張リ泣キ人ヲ嚇スル状ニ似タリ依テ此俗名アリ
大嶋クモ ○背高グモ ○土クモ又袋クモト云

茫石湖詩

静見簷蛛結網低 無端妨礙小虫飛 蜻蜓倒掛蜂兒窘
催喚山童為解圍

国立国会図書館 タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94
ガラス使用

䗐鶍能言争似鳳　蜘蛛雖巧不知蠶　王禹偁句
䖶蟲一名写字虫本綱　水スマシノ字虫　イロハ虫　ミコノマイ備中　コキアニ周防
ミイミイ京　サオトメ虫　スヾヤ水草津輕　ミコマイ備前　コキマワシ上野　カキ虫佐渡
水黽　チヤシク虫甲斐　アメウリ　アメントウ　川グモ　カキ虫佐渡　ヤゴ
ヤンマ筑紫　メウメ同　ヤモメ虫信乃　田ソウソウ琉球
高要縣志云水游即身如米而長六足立水面與波上下即指此
物而謂之六足　当作四足
三才圖會　アメ々一名鈎倒虫奥州方言テニナカク虫備前方言シリフリ虫
赤ホウフリ春ノ末蚊ニ化ス
紫稍花　江湖方言カニクソ
赤クラゲ又島クラゲ　鼓クラゲ　四ツ目クラゲ筑紫　イラクラゲ
藻屑ガニ　水引ガニ呉昌　猩々ガニ越前ノ　蟛蜞ガニ　汝朽ヤウナルモノ
溪蟹　沢ガニ　一ミシチウガニ九州　藻ガニ　油ガニ　唐人ガニ
蝉ガニ　蘆虎　ヘンケイガニ　又猩々ガニ又目出タガニ
タハニエビ　シツハダキ　古曲原　ウナハガニ　西国

土蟀　福及府志　和名コカイ又海ミヽズ河水ト潮水トノ境ニ在リ
泥沙中ニ堀取形扁而也佃ニ足アリ牙アリ人ノ手ヲ咬ム漢
人沙糖ヲ以テ一個ヲ丸呑ニシテ淋病ヲ治ストニ云黒焼ニシテ
久淋有効冬月ノ春迄魚ノ餌トス老タル者大四五寸ニ及フ
水蠱蟲　足二十ヒ　ハカチ虫
水蠆　ミヤラ　ヤカラ虫ノ一種ユリノハナスヒ
松藻蟲　ホンボウ
塩ムシ　塩ノ塊中ニ居ル
犀川蟲　孫太郎虫ノ十也　ウオ虫　水中虫ノ類　尾州
ガムシ米沢食用スケンゴロウノ類　龍蝨　ケンゴロウ　古池多
棗貓 三品　稲虫 三品　白髪太夫　蠋也奥及方言
天狗子　雀ノタゴ　雀ノサアヨケ　甲及ニテサカナケ
クタマキ一名マフキリ　地膽　アリノオヤジ

栗冊訓誌

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

海ヘチヽ　蠖擭海ヘチハ海草ノ類ナラントカト思フ鰕ノ作ルモノハ海老同穴ト呼フナリスポンスハ又一種和蘭産ノモノナリ尚可尋
海中ノ産ナリサリカテノ造成処ノ巣也或云海中ニ此物ヲ生シテ
後鰕雌雄寄居シテ我室トス此鰕ヲ寄生鰕ト云空売ノ中
螺中ニ宿ヲ仮借スル寄居虫ト云其意同シト云ヘリ此巣ハ
鰕ノ雛雄ノカニテ作レル者ト云ヘ共巓フニ此小鰕ノ巧ニアラサルヘ
蜊蛤ノ異呂ト云ヘリ
海老同穴ハ毛利候原今長ク及清末海中所産其地ノ方言
ナリ蜊蛤ノ異呂ニシテ雌雄一処ニ居ス巣ヲ造リ其中ニスム
スクモ虫ハ竹蚤　入道虫　チヤウチン虫　キツタケコロウ　甲州ニテノ名ナリト云
茶引クモ　足長大青　赤クモ　蠨蛸　在戸　足高クモ　産頭クモ
龍クモ　ミセハリクモ　白クモ　青クモ
鹿ノ角　芋虫ノ類　虎頭蜂 山ハチ 薬性奇方　螺蠃トクリハチ オニコロウ 備后
独脚蜂 初及名草郡稽限社中ノ大樹ノ根皮粘着ス
鰕夷地ニノナト云物　海膽刺ノ如シ

岸相醫諸抄
津久井縣道志川献上ノ鮎土人云ハナマアリト云山鳧ノ義ニアラス鮎
肥大ニシテ頭作小サク形鯛ニ類ス故ニハナマアリト云
江湖鮒ニアリ一ヲ真フナ至稀味甚美頭小サク実リテ不大大
椎ノ覚シキ庁骨実リテ高ク起レリ二ハカンザウノ関東ニテ丸ズ
ナト云形丸ク服赤ク光ル三ヲヒワラ関東ノヒラカナナリ又ミゴロ共云
魚美悪ヲ知尾末ニ至迄肉肥美尾末ニ至急ニヤセタルハ味劣ル
是オ一ノ目利ナリ　肥雌瘦ハ雄也肥着味美トハ一概ニ言難シ
鯽腹ニ満テ肥タルハ肉味淡シ鯽ヲ不成前雌味勝レリト鯽ヲ
成スノ後ハ味雄ニ不及惣テ雄魚ハ肉堅ク雌魚ハ肉軟也
比目魚膽甚効アリ屡試ニ魚毒腹痛ニ殊効大嶘 下冊ノ
魚商某ハ漁人ヨリ魚ヲ得新者ヲ鴉ヘ送ルヲ業トス冬ニ春ノ
間ハ一日ニ百余頭ノ比目魚鰓下ヨリ膽ヲ抜去江戸ニ送ル
琵琶魚ノ膽気味淡ク大魚ニシテ膽甚少ナリ

菌蕈毒ノ木ヨリ生ル者皆食フヘシ伐リ株ノ古根ヨリ生ル者ハ其
茎三節アリ縦ニ是ヲ裂ノニ蓋ニ至迄直理ニ分カ裂スル者皆
食フヘシコレヲ裂ニ横ニ折レ及白汁出ル者柔脆破レ易キモノ
不可食有毒塩水ニツケ蒸キテ破壊セサルモノ可食菌及
湿土穢物ノ化菌ハ皆煮蒸ヲ経レハ破壊シテ飴ノ如シ
猿橋ニ滞留岩殿山ニ登一面ノ石上巻柏ノミ大者三尺ニ及フ天
鼠殊ニ多シ大サ三尺許モアリ

安部棣齋

蘐居放言抄　合冊写本十五巻

砭石ヲ石砮ニ充　石果　石炭実ニ充不穏　佛郎山嵌　鑛東ト云フ　磺ニ充　倍二七
催乾　タンゴ石ニ充不穏當　白脆　水銀鑛ニ充　不穏
鹹砂　新諳引厄中ノ鹵ト云　山景所謂樹塩　西洋ホツクスニ充皆不穏　九熟　卅不穏當　名医別録　サノロゲニ充
紫給　別録護蘋梅ニ充　三角風　一名三角風　騰ニ充不穏　全鏁　東風菜　非野粉團兒ナリ
骨砕補　蘭猴ニ充不宜　月明瓜　源錫白スノ瓜ニ充可疑　㮁祇　西番リウムナルニヨス
子蓮　秋花可從　蕃奈ワンハス　折傷木　穫　唐本草ウトカツラニ充不宜
紫宮花　百花譜ホウセンクニ充　突厥白　同室本草琉球旋花ニ充
猫子當時猶鉄色者近時自尾振出

巻三

苦棗　酸棗ニ充不穏　阿月渾子　ソバノ木ニ充不宜　必栗香　野胡桃ニ充不穏
都念子　野牡丹充不宜　虎散　觀音竹ニ充不可ナリ　木竹子　蒲桃充不穏
万作ニ種類有更ヲ云　英翰一ニシサク黄者ヲ黄ハ金ヲサンサク
滲紅ノ者ヲ赤銅一ニシサク又合牽ヲ紅万作ト云　金樽梅ヲ充不穏当
戯果
陳扶揺曰山楂実有赤黄白三色肥者如小林檎小者如楂頭九
月乃熟味似楂子而微酢多生於山原茅林中猴鼠喜食
小児以為戯果
枌榆滑之　内則云
抄紙皆資榆皮之粘汁　奥山石城　駿州用南五味子藤

豫州用石蒜根濃州用錦帶花一種山トロヽヲ

刺楸子

刺楸ハリギリ一名アクタラ一名タラノ木又オヽタラ近来所用ノ
鼠梨子者刺楸子ナリト云茶肆チリモリシトウト呼フ天
保壬寅ノ比浪花大黄ノ價四百銭目ニ至リシ比大黄ノ代用ニ致
ス流行ナリ岩城土人云此実生食或煎服大発下利請問
其ノ名非鼠梨刺楸子也ト云ヽ
榕室君ハ日光採薬記ニ出タル三子ハリノ木ノ実[illegible]云居
二ハ毒アリト見ユ刺楸子欤三子ハリノ実カ可考

巻之四

土肉　海コカ海参毋也ト云ヽ可考

蜆　尓雅ニ縊女也化為小黄蝶　海中ノ蜆トハ別ナリ

線虫　閩小紀　足一ヽトヒニ元　先可従ア

風虫　晴川蟹録云蟹之腹有風虫状如木鼈子而小
色白大発風毒食者宜去之
楙博按　蟹譜謂之風虫蓋魚虱之属

本蛤腹中有之人煮食之加尓久具利ト云即寄居虫ト云ニ
楙　蛤貝中ノ小蟹アリ寄居蟹ト云俗ニヤドカリガニト呼フ此モノチラカ

姑労　臨海水土記曰似車螯而殻薄者曰姑労[illegible]

巻之五

比良女有一種於水生者奉使採菜行記云出羽秋田城外
有河其源湍注於山谷其中産奇魚土人呼曰舊羽比目
頗如鞋底魚大小五六寸較比唯髭鼠尾小異味亦似而美
過之蓋於水比目也　蘿按於水比目有之ヲ不聞奇品ナリ

魚鯗

行厨集云不著塩而乾者曰鮿魚俗謂風魚也著塩而
乾者脯魚又曰鯗魚著塩不乾者曰淹魚糟收者曰
糟魚酒汁浸者曰醉魚留青日札曰鯗古謂之薨魚
周礼弁魚物為魚薨注魚乾也通稿故今名乾魚尓
雅翼南人以魚薨而食之曰鯗魚宗時武昌謂之於魚

今有鹹鹵未乾者直曰鹵魚 下略

海馬一種有兩鰭如翅者宁実天狗ト云阿波方言天狗

又一種長四五寸額有兩角四稜削成者楊枝魚ト呼

巻之六

鸈 山カラ又ニ見可考

秦吉了 秦吉鳥又九官九綬 鳩喚 福州土人呼

唐書林邑出結遼鳥即吉了屈翁山新語曰以眼為別

紺瑶錦

占春先生云紺瑶錦蓋中山之土名或謂之鶉鷯即鴇之種

也喜任按今人畜之全形似慈鳥而小藍觜鉄脚揚赤

眩燿声似鵲而小又按墨子所謂赤鳥銜珪者蓋此類也

烏鬼

尒雅鶿別録曰鸕鶿尒雅翼峽中號為烏鬼

天狗

即奥狗 本草拾遺 八ハ也ミ 一名鵋 音忌雅 一名天狗即紅翠 ヨ字通

寒皐即鸜鵒 淮南萬畢 鴝鵒 考工記 八哥亦八八兒 負暄録

喇々鳥 廣韻

冰駱駝 百鳥畜 未詳 喜任云夜知延夫薩及反允左義野玄延允兼右

松鶖鳥 福州土名 一名海和尚俗云加計須一名加志止利 此説不穏

海鷲哥 イウヘアハアイ 蝦夷 ヲクチヨロシヤ 此説モ不穏當

老鶬雀 一名千里雀 花片女 薩及方言 俗ニ云菊イタヾキ

海八哥

説文觧本草方曰一名鵁時珍云一名沢虞俗名護田鳥

喜任按是水鳥也邦俗称鶴即方目也尒雅云鸍鶴沢虞注今

媧沢鳥似水鴨蒼黒色琉球使差所謂海八哥黒身紅頭緑足

一名田雞者是也晨者将翁先生嘗之福州人云是田雞一名海

八哥可見清人亦有此称

拙老婆 和名宁曽

文政丁亥夏予採薬於武之秩父比企郡嘗入乳穴洞中洞

中得石燕形状与蝙蝠無異而頭有凹処亦与蝙蝠同肥

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94　ガラス使用

後之産亦豈一物乎唯是独脚之説或可疑按蝙蝠星鼯有小鈎爪是以倒投而懸石蒉亦有小鈎爪以懸自他望之似以独脚倒懸者故有此説

鳥巣同穴

以鼸巣充之不穏説也

雞卵中空

友人諦予云備前八田村邉﨑下小児取雞子鑿䧢𪃿吮其黄孚白乗朝暾未出時收取稲苗葉上之露実之殻中以紙封䧢𪃿之日中卯即飛揚常以為戯予始以為奇後讀物理小識載中徳曰雞子開小竅去黄白入露水糊以油紙日中晒之離地二三尺乃知唐山亦有此戯而友人海客所信

木果安

渠搜

本艸綱目虎所録渠搜東壁注曰逸周書渠搜西戎露犬也能食虎豹一言犴胡犬也

狗熊

李心齊金川鎖記熊有人熊馬熊狗熊猪熊唯所見狗熊云ヽ

海猪

本草海象即時珍所謂海猪其牙即蕀角也明一統志女直土産蕀角即海象牙 物理小識ヲ引

夷人志加伊多氏 蕃萑按海象牙躍海莫涌ニ出ルセイウチナリト百品考ニ見タリ又漂流記ノ中ニ畫アリテホウスト呼其牙ヲ近来夜国ニテ英人密漬帰草葉廿枚許ト牙ノ一本トヲ来ガスト云予物産會ニテ折ヽ出品セシ人有リ

海獾 ラツコニ充

本草ニ女真地面有海獾又可供衣裘

麡

夜譚随录曰似麋而大者堪達尓汗ト云即麡也ト云ヽ不穏當

蒙頌 出交趾補巣勝于貓

果然附录一名蒙貴乃蜼音犹即果然之小者

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94

ガラス使用

産次雲八紘譯史曰裝貴狀如猩而小捕鼠勝猫居以安荷
留也文政四年辛巳洋舶面似猩而四足皆可攫物也試視
諸則此曰狸猴獸也

山狸

八紘譯史曰山狸其形似麝臍有肉嚢香滿其中病即
剔於石其能療耳疾
外紀云山狸似麝臍有肉嚢香滿其中轍病向
石上剔出之和蘭与武獸譜カントル

福祿

留青日札曰福祿番人本名福俚狀如野驢花紋黒白文
錯堂洋可愛異它獸出忽魯謨斯等国王獵獲所不
載者又曰麒鳳龜龍乳謂之四霊麟獅子福祿玄
武我朝謂之四祥八紘譯史云福祿周身俱白中有細花
宛然如畫喜住村俗謂之迴道馬先考賢住曰住年舶
致之予察嘗野其真圖焉

人同

夜譚隨録曰康熙五十二年由喀尔喀至巴呈坤其地有獸似
猴非猴似猴非猴中國呼為人同甘京人呼為野人番人呼
為噶里住々窺伺穹見人飲食輒乞其余或竊取俯見小
刀之屬為人所見即葉槲而奔殺之不忍逐之後未曾無如
之何嘗狎一人同每蔍豆蕉汲等支吹之悉能任使至其
寢食雖不能言頗能察色居一年詔任將帰吹嘯馬前
最衙鈴淚下如瀋李亦為之酸鼻相從千餘里歴之不去
乃囑之曰汝之不能從我至中國猶我之不能留居此土也
可止若再行數里將迷途不得反矣人同始悲鳴而去

海島逸誌曰山客即野人如猩々之類産於深山之中面略
似人身如猴猱毛長二三寸高三尺腰大如斛敢不事跳舞
每仰卧坦後見人則以手掩其陰似亦知廉恥焉者陰阳山
客尚有羞惡之心而也如喜住拂西洋人謂之於良岳卒々乡
羊方輿志野人出明録木客蓋亦此類乎 中略

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』 請求記号 228-94
ガラス使用

又蓋褒貶之剖判而有生始出其次必先生蠢蠕蝡之物倏動微息其形未可名状者而蟲如蚯蚓蛆虫之類則有頭尾而其形始可名状者也而後魚雖有頭尾鰭鬣之類猶是無手全足而後鳥兩有而足目兩翅而後獸四足備矣其中又有伏翼鼯鼠之類四足而兩翅而後生獼猴狒々之類有四足皆可以攫物也其四体雖似人而未免横行之部也纔有人之一体耳漸而後至于人同四体備矣固在于縦行之部也則与人稍同唯未能言語也西洋人或云産深山幽谷之中故未書人間之言語也最後至乎人則百骸九竅無不具而神智充満是人所以為萬物之靈荀子曰草木有生無知禽獸有知而無義人有生有知生有知又且有義故最為有生之長也

野婆

唐蒙博物志曰日南有野女郡行不見夫其状白色徧體無衣襦

齊東野語云野婆出南丹州黄髪椎髻裸形跣足儼然若一媼群雌無牡上下山谷如飛猱

按南谿子曰往年日向飫肥山中投機射獸キ人ウジユミ護長物其形類婦人白色黒髪裸身無衣襦獵人以為神畏而棄之中谿或云是山女深山中時有之益野婆野女之属也

獅

神農本經疏云獅為百獸長故謂之獅出西域諸国状如鹿而小黄色亦如金色猱狗而頭大尾長亦有青色者銅頭鉄額鉤爪鋸牙弭耳昂鼻目光如電声吼如雷有耏髯日走五百里百獸辟易馬背溺血雖死後虎豹不敢食其肉蠅不敢集其尾物捍相畏如此 屎殺百虫去鬼氣

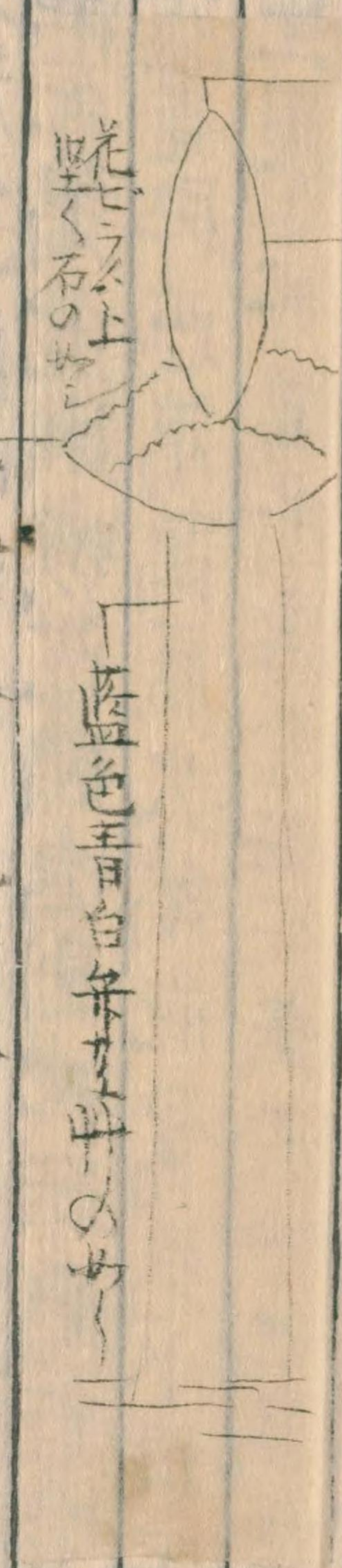
獅ハ画ク卜雖古来ヨリ獅来ナケレハ知ル人モナシ去ル文

化九年ノ比魯西亜漂流セシ新蔵ト云モノヲロシヤニノヨリ夫ヨリ本国伊勢ニ居ケル者ニ遣ハセシ品ノ内ニ毛付ノ皮ノ如者アリ毛ノ長三四寸茶色ナリ夜ハ大ニスカセハ光ルナリ犬ナト見テ皆逃去ル此皮獅々ナリト云ヘリ奇異ノ物ナリヤ不知其再ヒ右ノ如モノ不見文化ノ比ヨリ外国通商ノ交易モ盛ニナリケル故諸蛮ノモノ長崎又横濵エ蛮船入既ニ慶應ニ象虎ヲ大坂難波新川辺ニテ観場ニ出セリ次第ニ外国ノ商品舶来スレハ后ニハ獅々其外奇獣モ蛮船スヘシ去ナカラ獅々ハ得カタキ由ヲ聞ク

天明三年卯六月京角倉与市御代官所河内国村百姓九右衛門裏ニ奇花を生す四尺五寸許卯六月下旬ノ凡日数廿日程の間ニ右の如く相成其後ハ伸不申地中四五尺堀りて得共根深くしれん何程や智れ不申奇花の由名を不詳　天明雑録ニ見ゆ

初生如此形のもの也

此処朝より昼迄極紅暮より七ツ迄極紫色七つ後ハ元の如く紅色し
昳する白色さめの如し



此花弁芥子の花如罌粟ニ而巻紫色日向ハ金の如美也

一指石

淵鑑類函石ノ部ニ一指山堂肆考曰桐廬縣有石長一丈高五尺綴巖谷間以一指抵之則揺動人力多則不動故以一指名之ト

百品考三編ニハ揺動石一名風動石一指石和名ユルキ石出セリ本邦ニハ笠着山中ニ有リ出タリ予ハ讃ノ丸亀在一寺并ニ山城木津ニ一石有リ百品考ニハ石ノ両尖相遇テ勢ヒ如此ナルナリ大地震ナドニ遇テ一轉セバ揺動スル事ナカルヘシト云ニ予不審ナリ尚明者ヲ待

蟹十二種

蓬窓日録云呂亢台州命工作蟹圖凡十二種一曰蝤蛑二曰撥棹
三曰擁劍四曰彭螖五曰竭朴六曰沙狗七曰望潮八曰
倚望九曰石蜠十曰蚌江十一曰蘆虎十二曰彭蜞
又有黄甲蠘竈蟳蠘在海中竈竈島之東此一可補蟹譜
之遺蛺蟹譜亦甚略者不引汲冢書海陽巨蟹其殼専
車何邪余又考本草又有蟳歩又有執火又有彭蜞六足者名
蛫四足者名北皆有毒若誤食之急以豉汁可解

互相畏

蓬窓日録云海青鷙鳥也而獨畏莫象猛獸也而独畏
鼠蜈蚣毒虫也過蝦蟇不能行蚯蚓長物也見蝍
蛆則畏其口刺蝟能擒金蠶蠱之鬼蟲遇鼠能致猛虎
之蠱一死鵝飛則蛾沉鵰鳴則蛇結鸛俯鳴則蛋仰鳴
則雨孔雀辟悪鶏鵲厭火鶴能驚鬼水母生兒無目亀
鼈生兒無耳鶴所尋者無死気於中也鳥無胃肺蛤蠣
無臓腸以空中而生蠶以無胃而盲瞎抱者鵜鶘鶴
也影抱者亀鼈鼉也鹿齧薺苨可解鳥毒雀啣艾葉可
奪莫巣

貝

貿易用貝貝俗謂貝以一為庄四庄為手四手為苗五苗為索
盖八十貝也 同上

河蝦鳴

皇和魚譜云カジカ石伏魚ハ閩通志山川ノ清流ニ生ス味美ナリ
焼キ風乾シ味噌汁ニ調シ食フ其觧亦佳ナリ塩蔵シ遠キニ
寄スヘシ庖丁聞書ニカジカニ竹等白瓜ナト入レ汁ニ調スルヲ越川汁
ト云ヘリ按ルニ此魚夜鳴声有ルニ依テカジカト呼フヨシ古クヨリ
云傳ヘ古歌ニモ見ユト雖其鳴ク者ハ河蝦ニ決メ此魚ニ非スナラ
蟾蜩ノ鳴ケルヲ誤リ認テ倒ニ歌女ノ名ヲカウムラセシタクヒナリ
ト云ニ下略 藿按ルニ此説亦一説ナリ大坂川々河蝦多シ蝦ノナ
クト云事更ニ言フ人ナシ尚聞エヘホシ明者ヲ待ツ

蠣ノ九薬

蟹ノ九薬ト云名八西宮堺海辺ニテ所呼ナリ去ナカラ知ル人更希ナリ予秋ノ比住吉海辺ニテハ、エントウラ取ラントテ処ニ土ノ細小九ウツ高クツミ有ル又其ホトリニ穴有リ蠣ケ処アリ予ハ虻明土ナラント思フテ飯リキ其後尼崎エ行キタリシニ常嶋ノ渡場折節干潮ニテ一滴ノ水ナシ提ノ辺ニ小細ノ土丸在リ多ク蟹モ虻明ノ有ルナスナラントキニ採ルニ砂ニテ丸シクル故皆ク々ケタリ其辺ノ人ニ尋子ケレハ明ニアラズ蠣ノナスナリトヲ名ヲ問ヘドモ不知トヲ其後帝鑑及ニテ見当リシ方ヲ至テ細小ナリ尤土粘土故取金シ取飯リ奇ナル莫ヲ感シ或時川方松浦侯屋敷ニ話シケレハ成程蠣土ヲ左リニテ採リ右ニ渡シ漬ル者ナリ潮来ル迄ノ間ナリ予ハ三四度モ土砂ヲ当テ見セリ尤秋ノ比天気快晴ノ時ナリケルヤ蟹ノ九薬ト呼フ外ニ方言有ルヤ不知承余リ見シ人モ有ニシト詳ラ九ケ其後尓雅翼感應経蟹属名彭明以蜃取土作九

従潮未至潮去或三百九因名三百九雅俎最九生海辺取似彭蜞取土作九最満三百而潮生人以為候因名常在海汝中一日汝九有青脚白脚二種

異魚圖賛補云最九介典教九取亦似蜞九土三百九

潮信典期

紅蚕豆

文化十三年清朝人長脊エ紅色ノ蚕豆ヲ持渡リ舘内ニテ食用セリトソ其豆ヲ十粒金百匹ニテ求飯リ大坂ニテ一粒ヲ百匹充ニ賣ケルトヲ其後イツレエ有リシヤ不知文政十一年ノ比イロくト尋ケレ共ナシ然ル処天保元年ニ至リ尼崎家老堀某方ニ有ル由ヲ聞キ人ヲ以テ配分ヲ願ヒシニ廿粒許ヲ贈ラルニ粒許ツヽ京河内北在泉及ナトヘ送ル追々ニ下種スルニ能クテキタリ其内井坂氏難波村エ

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

下種セシムルニ色格別ニ宜色紅色別段ニ美ナリ煮ル時ハ
黒色トナリ更ニ不美尤不煮時ハ別シテ紅色ヨシ皮ハ少
シ堅シ　近時百品考考有ル下三

古名録引

所謂古名者始國史國朝本草字鏡倭名鈔萬葉集而終於
天正慶長迺其間於舊書者亦有用慶長已降名矣如
近世所称則不便攷索於古史故不載録之也如大同類
聚方則古書既亡失矣今所流布者蓋後人之偽選而
有可疑之名称故暫録其要以備考證俟眞書訂正
至日本風土記則亦後作而今莫藉總存於若干焉其
他雖不係物類書聊采其要記之也且延喜式所載
藥名總以漢字註之固無用國字然本草啓蒙以傍
訓悉為式文傍訓輙後人所加大和本草亦誤以萬葉
集註釈豸兂為猶台啓蒙為此説所蔽以傳写国
字錯譌為漢字故本文大意已齟齬矣斯以此書正古
名之出處不拘國書所載部中凡漏渚於莫草者悉
失其本書義也僕久歎ニ
国朝之苗書物名之無詳録従来熱古採蹟采其糟
粕編輯之然書内非無魯魚誤文中差謬亦多矣後
識者正之

天保十四癸卯初夏　黒田翠山

書中條目相分如左

一名　集註　今案　正誤　形状　附録
用法　制用　薬製　造制　附方

古名録目録

第一巻　天水類上十三種　第二巻　天水類下十三種
第三巻　地水類上三十種　第四巻　地水類下四十六種
第五巻　鹵石類十九種　第六巻　火類二十四種
第七巻　金類五十四種　第八巻　珠玉類四十六種　海石類附

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94
ガラス使用

第九卷　石類　五十四種
第十一卷　彩色類　十九種
第十三卷　花草類　下三十四種
第十五卷　隰草類　四十四種
第十七卷　蕪草類　八種
第十九卷　菜草類　上十二種
第二十一卷　蔓草類　幸八種
第二十三卷　水草類　下十七種
第廿五卷　泽州類　十四種
第二十七卷　石州類　十二種
第二十九卷　寓木類　三種　苔類　七種　萍類　一種　水藻類　三種　水苔類　五種
第廿九卷　花木類　上五十七種
第三十一卷　常盤樹類　三十八種
第三十三卷　大木類　上二十一種
第三十五卷　小木類　三十種

第十卷　土類　四種　灰塵類　三十三種
第十二卷　花草類　上三十六種
第十四卷　野草類　四十六種
第十六卷　山草類　三十六種
第十八卷　香草類　三十四種
第二十卷　菜草類　十九種
第二十二卷　水草類　上二十五種
第二十四卷　蕃香廿類　乾蕃菜廿類　三十種
雜草類　廿六種　諸草未詳屬

第三十六卷　雜木類　三種　附录二種　異木類　五種
第三十七卷　蓄木類　四十二種
第三十九卷　菜類　二十四種
第四十一卷　圓果類　四十一種
第四十三卷　菰類　七種
第四十五卷　薑類　十五種
第四十七卷　豆類　十六種
第四十九卷　羽虫類　四十四種
第五十一卷　鳴虫類　十二種
第五十三卷　甲虫類　九種
第五十四卷　鮮虫類　三種　海濱類　五種
第五十五卷　海魚類　下三十四種　雜魚類　十種　異魚類　十一種
第五十七卷　河魚類　三十二種
第五十九卷　螺類　十六種
第六十卷　雜介類　四十九種　水產類　諸介類　十九種　附録　二種

第六十一巻亀鼈類二十種
第六十二巻水禽類上廿八種附録一種
第六十三巻水禽類下廿三種
第六十四巻山禽類上四十五種
第六十五巻山禽類下十四種
第六十六巻林禽類上三十四種
第六十七巻林禽類下十四種
野禽類八種
附録一種
第六十九巻小鳥類十四種
雜禽類七種
第七十巻養禽類十六種
第七十一巻番禽類七種
異禽類十五種
第七十二巻獸類四十七種
第七十三巻獸類下十四種
水獸類六種
第七十四巻蕃獸類四種
異獸類三種
第七十五巻畜類上十八種
第七十六巻畜類中十八種
第七十七巻畜類下四十二種
第七十八巻人類上四十二種
第七十九巻人類下十二種
第八十巻鬼魅類十五種
第八十一巻造醸類上三十五種
第八十二巻造醸類下三十七種
第八十三巻食物類上三十九種
第八十四巻食物類下三十種
第八十五巻草子類十五種

總計二千五百十二種 此ハ写本也紫藤園考證二冊上梓ト云

右ハ紀州黒田翠山俗称十大夫蘭山先生真門人也日光採薬之節随從せし人也紀伊侯御薬園預り役也至テ物産數奇者也毎度入来有り性急ノ人也著述紫藤園考證前後上梓ナル其余ハ写本也熊野物産志大和厨山志水族志千貝品右名録等也

よら貝二種

沖ニ有り長さ四五分海ニてハ三四分位巻ニして漸ク細くふとさ有り色黄黒食用形ハ同し又一種有り是ハ漕ちの満川れ泥中ニ有り形沖のよらと同しく七分くらいさくして気臭く賤しけ貝夏ニ至て蛍とありて飛也けるなり其貝の多寺泥ニ四年許取来りて平ニおき桶ニ入て水をかへてやらしやうの菜葉を多く泥りさうし見して風涼しき
だめうも時より貝の中より虫如く蛍とありて草の葉ニ静ニのほりおそして有くてちやりせきさうし是見ゆへ其桶の中五六枚のうち子六七分の貝蛍と形りし

沖ひたら貝とハ別種なるへし　湖魚考

一　藿拷貝ハ螢ニ化する不審なし録して明者を待

たつのこひこ

池澤の鯉鮒の多く住る處に有り秋水の流れくる處を好む
石或ハ木竹の根又ハ葭又ハ菰なとの根ニ付く有則こひふ
なの鱗を飾りて手をかしらとし或日まいれ根ニ附
よしといふ又色黒く紫なるハ時春よしと云四月の頃より夫
より過ぐハ土に添と成なり　漢名紫稍花
按本草知要ニ云本綱ニ龍の精と云ハ誤也
婦人良方ニ云紫稍花生湖澤中乃魚蝦生卵于竹木之上
状如糖繖去木用之

秘府略

秘府略ハ管公ノ御著并ニ云フ全部ハ千巻也トス其内八百六十四巻
百穀ノ部ハ百六十八巻布帛部写本十二巻ニ見ス纂
堂木世粛所蔵ナリ巻中古書目ヲ悉ク丁寧ニ引書ニシタルモ
ノナリ稲若水著諸物類纂六百冊物産ノ部门人所蔵
是モ諸書ヲ引證セリ併秘府略トハ余程後世ノ者故ニ書
名多シ原書ハ加州侯御蔵書也秘府略ハ何レノ御蔵
ナルヤ未聞

228
台6
94

国立国会図書館　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『鐘奇遺筆』　請求記号 228-94

ガラス使用